

福岡空港

雀居^{ささ}屋^い遺跡 6

雀居ムラのガイド・データブック

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第677集

2001

福岡市教育委員会







1 完成した福岡空港国際線ターミナル

海に開かれた福岡市は、古くよりアジア各地とさかんな交流を続けてきました。市内には、米作り発祥の板付遺跡、古代の国際外交施設であった鴻臚館をはじめ対外交渉を示す遺跡が数多く残されています。これらの遺跡は、日本の歴史上重要であるばかりでなく、本市の文化的風土や市民のアイデンティティを育んできました。

本書で報告する雀居遺跡は、福岡空港西側の整備工事に先立って、平成3年から平成10年の13次に渡って発掘調査をいたしました。その結果、環溝と大型掘立建物跡などの遺構、米作り開始期の木製農具や織り具などの遺物が相次いで発見されました。特に環溝とここから出土した木製短甲、楯が、中国の歴史書『魏志倭人伝』に記述されている「倭国大乱」の時期に一致することから、弥生社会の緊張状況を物語るものとして、マスコミで大きく報道されました。

考古学界や歴史ファンだけでなく市民の高い関心を集めたことから、平成6年2月に福岡市埋蔵文化財センターで、『雀居遺跡最新情報』として公開講座と出土品の展示会を企画し、さらに国際線ターミナルの完成直前の平成11年2月には、福岡市博物館で『発掘福岡空港—雀居遺跡—』展を開催しました。いずれも、多くの方々にご見学いただきました。

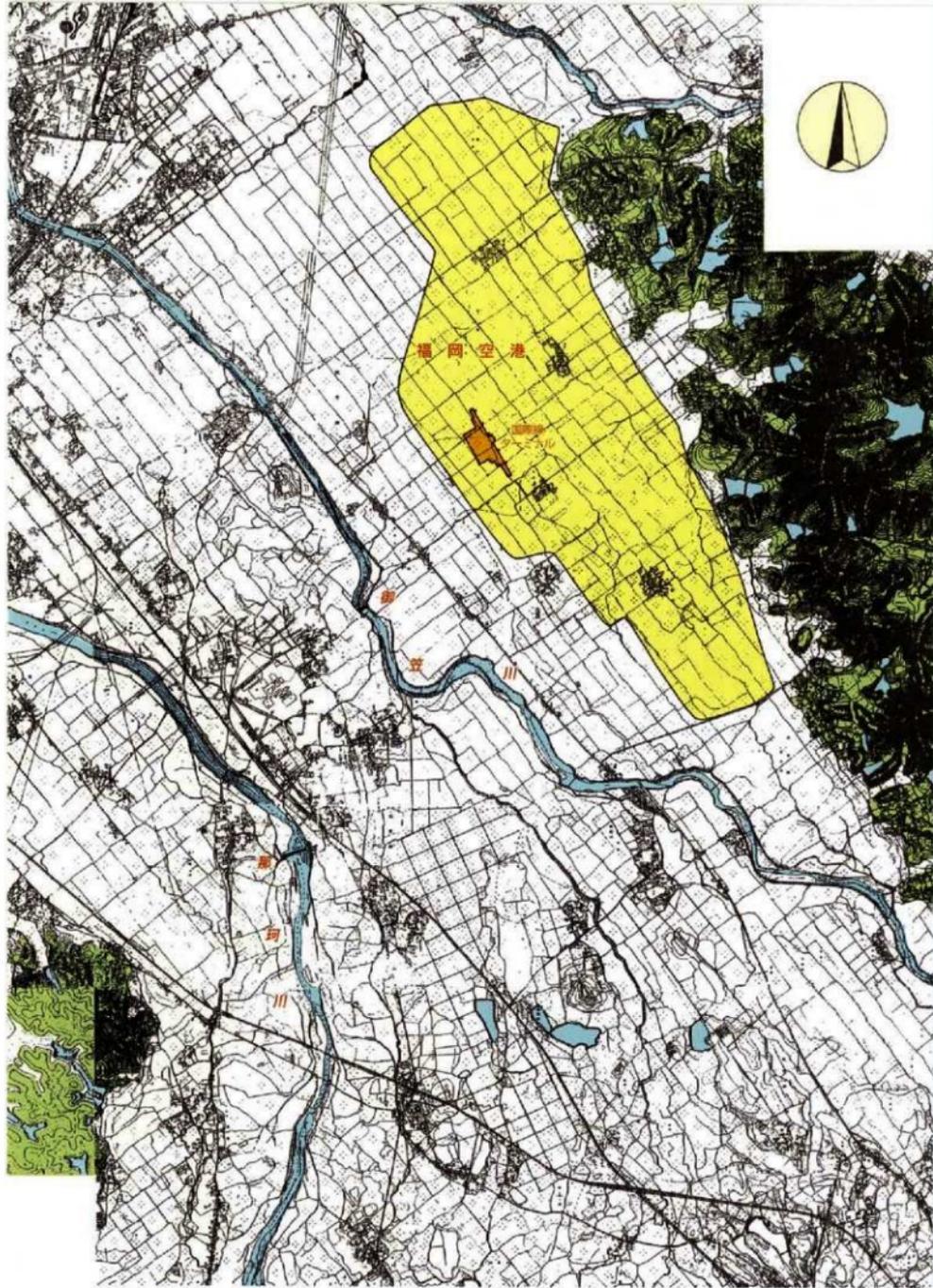
調査報告書は、これまでに5冊発行していますが、本書は、より一層雀居遺跡をご理解いただくように、調査成果やデータを簡潔にまとめ、さらに周辺遺跡の最新情報も加えてガイドブック風に編集いたしました。多くの方々にご利用いただき、埋蔵文化財に対するご理解を深めていただければ幸いです。

平成13年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

例言

1. 雀居遺跡は、福岡空港滑走路の西側に広がる遺跡です。国際線ターミナルや自衛隊施設など福岡空港西側整備工事に先立って平成3年から平成10年までの8年間、13次に渡って発掘調査を行いました。第1次試掘調査をのぞく第2次から9次、11次調査については、すでに正式な調査報告書(『雀居遺跡1～5』計5冊)を発行していますが、第10、12、13次調査については、平成14年度に発行の計画で現在資料整理を進めています。毎年、興味深い遺物、遺構の発見が相次ぎ、マスコミにも大きく報道され、学界の注目を集めました。が、あいにく空港の立入禁止区域であったことから、市民の皆さんを対象にした現地説明会を一度も開催することができませんでした。また既刊の調査報告書は、5分冊となり、かつ学術的性格から、難解な考古学用語が多用され、雀居遺跡を簡単に理解することはできません。そこでこれまでの発掘調査を簡潔にまとめたのが本書です。雀居ムラのガイドブック、あるいはデータブックとして、また分冊の報告書の検索用としてもご利用下さい。
2. 各次調査の概要は、古代、古墳時代、弥生時代後期～中期、弥生時代前期～早期(縄文時代晩期終末)の4時代に分け、遺構と遺物を見開き4頁に紹介しています。左右側の頁は、山折り、谷折りして別頁と比較できるように割り付けています。また航空写真を多用していますが、福岡空港上空から雀居遺跡を覗き、発掘作業と同じ体験をしていただきたいという趣意です。どうぞ雀居ムラへのタイムトリップをお楽しみください。
3. 本書に使用した方位は、すべて磁北です。遺構全体図は、できるだけ南北線が各頁の縦線となるようにし、水田の区画方向や建物の並び、遺構の配置などを、比較、検討できるように工夫しました。
4. 本書に使用した図、写真の大部分は、各次調査報告書から転載しています。その号数、頁を記入していますので、詳しい情報が必要な時は各報告書をお読みください。なお未報告の第10、12、13次調査の遺物実測や遺構図トレースなどは、整理調査員の坂本幸子、境聡子、羽方誠さんをお願いしました。
5. 空港の全体図や航空写真などは、国土交通省九州地方整備局博多港湾空港工事事務所(元運輸省第四港湾建設局)、および福岡市消防局消防航空隊の協力を得ました。
6. 本書の写真撮影、編集、執筆は、力武幸治が当たりましたが、整理作業員の池田由美、宮崎まり子、生垣綾子、渡辺敦子さん、城後渡君をはじめとして数多くの方々のご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。



2 昭和初めころの福岡通野周辺地図 (約 1/25,000)

周辺の遺跡(雀居ムラのご近所)

5頁は、現在の福岡空港周辺(主に博多区)の地図です。住宅やビル、そして高速道路や空港など高度に土地開発が進んだようすが図化されています。この地図では、昔からの地形を想像することはとてもできませんが、2頁の昭和初期ごろ陸軍陸地測量部が作成した地図では、空港建設前の河川の流れ、丘陵や池、集落の大きさや位置ばかりでなく、田圃の区画や水路の方向までも細かく表現されており、のどかな田圃風景を想像することができます。

南の太宰府市、大野城市から蛇行しながら北流してきた御笠川は、博多区板付付近で急に西に大きく屈曲し、旧国道3号線を横切り、さらに北流と屈曲を繰り返し、

博多湾に注いでいます。

この御笠川と西側の那珂川の沖積作用によって、博多湾に向かって逆三角形をした福岡平野ができました。平野には、いくつかの低丘陵と微高地があります。肥沃な平野の豊かな実りに恵まれたこの一帯には、集落や水田などの遺跡が集中しています。

ここでは、雀居遺跡の歴史的環境を理解するために、①御笠川西岸の那珂、比恵丘陵、②御笠川西岸沿いの低平地、③御笠川東岸の低平地と月隈丘陵の3地域に大きく分けて、主な遺跡を紹介します。

雀居ムラのご近所だったこれらの遺跡と、どのような関係があったのか、興味のあることです。



3 空から見た福岡市



4 福岡遺跡の無文土器

① 御笠川西岸、那珂・比恵丘陵の遺跡

御笠川の西岸、春日市からJR博多駅の南側までのびている春日丘陵は、弥生時代「奴国」の中心と推定されています。「魏志倭人伝」には、奴国には二万余戸と記述されていますが、全国でも有数の遺跡密集度を誇り、「弥生銀座」とも呼ばれています。この丘陵の北辺部に当たる比恵、那珂遺跡群では、これまでに合わせて140次を超す発掘調査を行っています。毎回、目を見張るような遺構、遺物が発見されています。

比恵遺跡群

第54次調査の弥生時代後期の井戸から出土した木製品に、担当者は一瞬息が止まりそうでした。それは、ヒノキの板材を円形に加工しており、両面の中央には三角形と円弧をアレンジした精巧な文様を彫刻しています。しかも赤く彩色されていたのです。外縁には、紐を通したと思われる小さな穴が二重に巡っています。復元すると直径31.5cmの大きさですが、残念ながら使用目的がわかりません。担当者は、出土地が海に面した、いわば奴国の入り口に当たることから、奴国の屋外標識として高々と掲げられていたと推測しています。奴国のシンボルマーク、まさに「弥生銀座」にふさわしい遺物です。



5 細かな文様で飾った木製品

那珂遺跡群

アサヒビール工場付近を境にして、北側を比恵遺跡群、南側を那珂遺跡群と呼んでいます。これまでの発掘調査の成果を1枚の地図に合成すると、弥生時代早期から大小いくつもの集落が営まれていることがわかります。第20次調査地では、久保園遺跡や雀居遺跡と同じような大型の竪立建物跡が見つかりました。また溝には、赤く彩色された美しい土器が数多く出土しました。おそらく折りやお祝い、あるいは宴の後に投げ込んだのでしょう。その具体的なようすは分かりませんが、自然や神を畏れ敬い、ムラの結びつきを大事にし、隣人や家族を愛する気持ちは、私たち以上に強かったと想像できます。



6 赤く塗った筒形土器

井尻遺跡群

比恵、那珂遺跡群と須玖岡本遺跡とのほぼ中間、西鉄井尻駅付近一帯に広がる遺跡群です。これまで17次の発掘調査が行われ、弥生時代の遺構から青銅器の鋳型が数多く出土しています。写真は、第6次調査の10号土壌から出土した鋳型で、鏡と鏃が両面に彫り込まれています。鏃の形は、雀居遺跡第5次出土の銅鏃によく似ています。

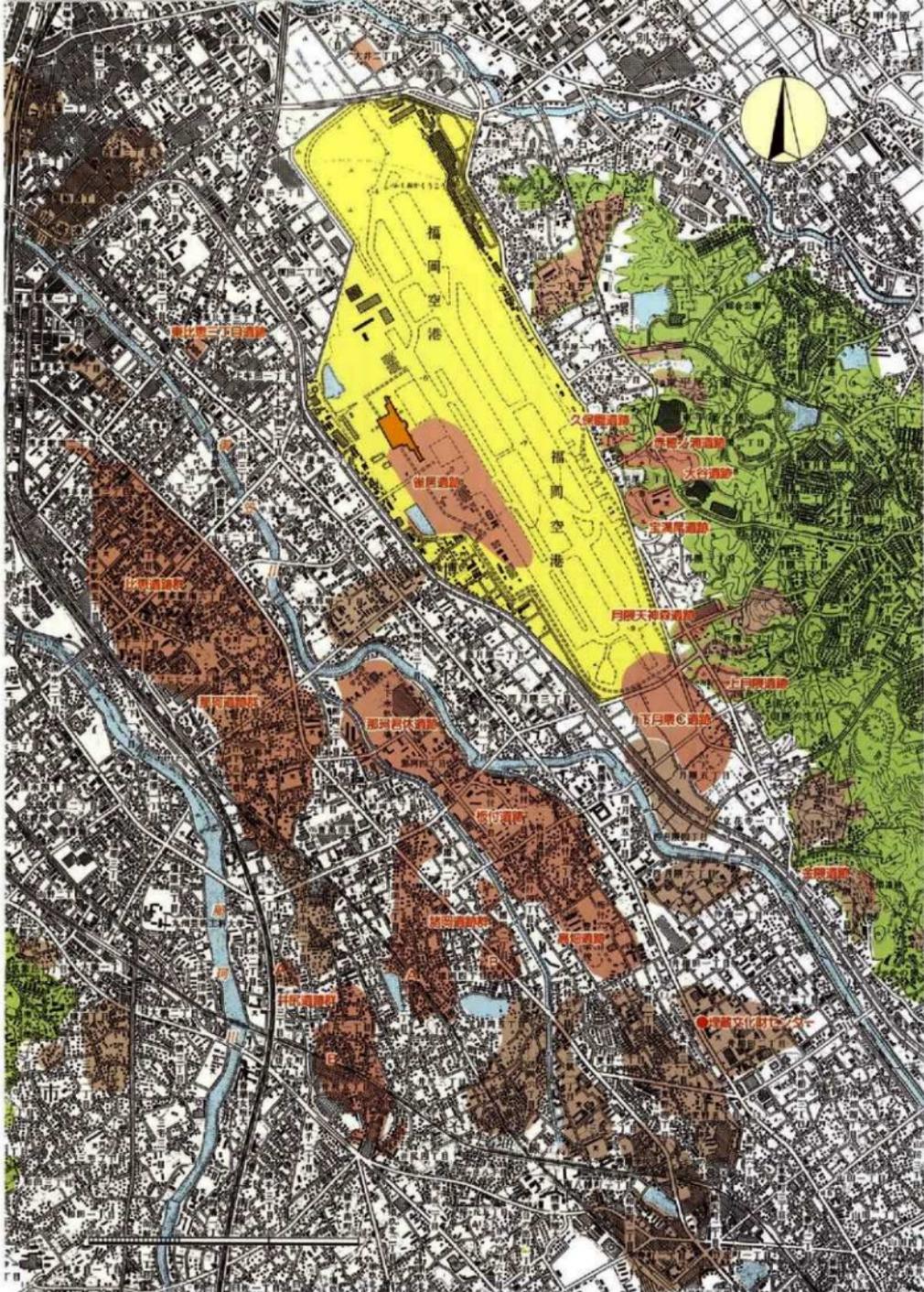
すぐ近くの春日市須玖坂本遺跡、須玖磨製遺跡、須玖五反田遺跡などでは、青銅器やガラスを製作した鋳型や工房跡も見つかっています。弥生時代の先進技術が集中する一大テクノポリスを形成しており、奴国の生産、経済力を知ることができます。



7 鏡と鏃の鋳型

諸岡遺跡

博多駅から南にのびる筑紫通りの諸岡四角を東に折れると坂付遺跡ですが、そのまま南進すると右手に諸岡遺跡の小高い丘陵が見えてきます。昭和47年以降の発掘によって、弥生時代の共同墓地が見つかり、墓棺墓には、貝の腕輪や銅剣が副葬されていました。また土壌から、口縁部を外に丸めた土器が出土しました。その形状は、朝鮮半島の無文土器とそっくりです。朝鮮半島からの渡来人が諸岡ムラにやってきたのでしょうか。弥生時代はしめ頃のさかんな交流を物語る重要な資料です。



8 福岡空港周辺の道跡分布図 (1/25,000)
 巻頭

② 御笠川西岸の低平地

比那、那珂丘陵を住まいや、墓地として利用していた弥生人たちは、水田を東の御笠川に挟まれた低平地に求めていたのでしょう。この場所では、環溝集落の板付遺跡をはじめとして、弥生時代から古墳時代にかけての稲作技術や灌漑方法を明らかにする重要な遺跡が発掘されています。

東比恵三丁目遺跡

土器をシンボルマークとしている市営地下鉄東比恵駅の一帯は、今ではすっかり都市化していますが、平成9、10年の発掘で、地下2.5mに弥生時代中期の水田が広がっていることが分かりました。水田は、長方形に区画されており、1枚の面積は約56㎡です。出土した鍬や鋤は、たしかに木製品ですが、その形は鉄で作った現代品と変わりありません。2千年の間に変わったのは、木が鉄になっただけのこと。弥生人の知恵や高い技術に、あらためて驚きました。



9 長方形の水田

那珂君休遺跡

第3次調査では、中世、古墳時代の水田と弥生時代中期から後期にかけての井堰が見つかりました。古墳時代の水田は、蜂の巣のような六角形で、1枚の面積は約39㎡という狭さです。なぜ耕作しにくい小区画としたのでしょうか。

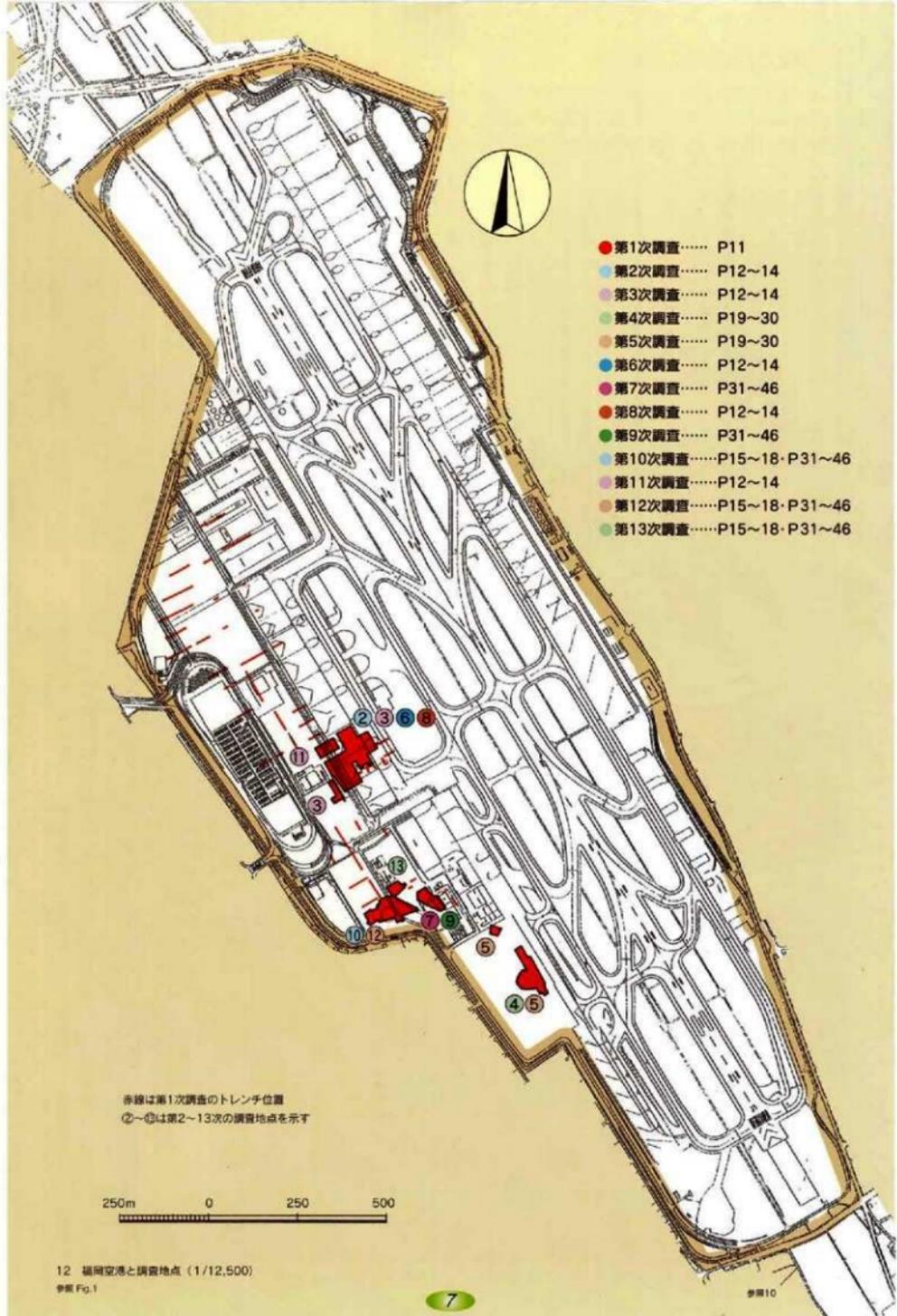
幅約40mの川には、数え切れないほどの木杭を打ち込み、横木を渡し、流れをせき止めた井堰が築かれています。水位を上げて、乾燥していた土地に水を引き、新しい水田を作ったのでしょう。発掘後に建設された小学校は、全国一大きい弥生時代の井堰が発見されたことから、弥生小学校という校名になりました。弥生人に負けないように逞しく育って欲しいという思いが込められています。



10 蜂の巣形の水田



11 月原丘陵上空から見た福岡平野



- 第1次調査…… P11
- 第2次調査…… P12~14
- 第3次調査…… P12~14
- 第4次調査…… P19~30
- 第5次調査…… P19~30
- 第6次調査…… P12~14
- 第7次調査…… P31~46
- 第8次調査…… P12~14
- 第9次調査…… P31~46
- 第10次調査…… P15~18・P31~46
- 第11次調査…… P12~14
- 第12次調査…… P15~18・P31~46
- 第13次調査…… P15~18・P31~46

赤線は第1次調査のトレンチ位置
 ②~⑬は第2~13次の調査地点を示す

250m 0 250 500



13 空から見た板付遺跡



14 板付弥生のムラの秋祭り

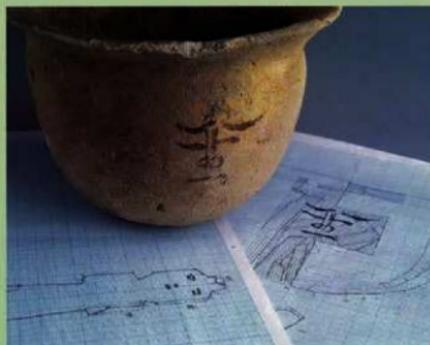
板付遺跡

教科書に掲載されているので誰もが知っている板付遺跡は、弥生時代最古の米作りの環溝集落です。台地のムラは、V字形の深い溝で取り囲まれ、周辺には長方形に区画した水田が整然と広がっていました。

現在、2400年前のムラが復元され、夏頭衣や土器などのムラ人養成実技教室や弥生時代以来の年中行事が開催されています。見るだけの史跡から、見学者がムラ人になって自分たちのムラを作るという史跡整備の新しい試みが実践されています。

高畑遺跡

板付遺跡の台地から南に1km、現在は九州管区警察学校になっている周辺が高畑遺跡です。昭和48年から18次の発掘が行われ、古代の道やお竈に関する土器や人形が出土し、福岡平野の古代官道や官衛など古代の公共施設を調べる上で見逃せない遺跡です。特に雀居遺跡でも、同じようなお竈の人形が発見されており注目されます。



15 お竈に流した土器

③ 御笠川東岸の低平地と月隈丘陵の遺跡

福岡平野の東端には、東の糟屋郡とを分ける標高50~80m程の月隈丘陵が南東から北西方向にのびています。この丘陵の北辺部は、福岡空港と同じように米軍の基地施設として使用され、遺跡の分布がわかりませんでした。昭和47年の返還後、サッカー場、野球場、陸上競技場、プールなど運動施設の建設が計画され、大谷遺跡、久保園遺跡、赤穂ノ浦遺跡などを発掘しました。現在は、「博多の森」として市民に親しまれています。

月隈丘陵の南寄りには位置する金隈遺跡は、本市文化課発足直後の困難な状況下での発掘でしたが、弥生時代の共同墓地から134体の弥生人骨が見つかり、弥生時代の墓制や人骨の研究に大きな成果を上げました。その中野原に指定され、大きな展示室の中では、墓棺内に埋葬された人骨を発掘した姿のままで見ることが出来ます。また、福岡空港調節池建設地である下月隈C遺跡は、発掘継続中で、雀居遺跡と同じように、弥生、古墳時代の集落や古代、中世の水田跡などが見つかっています。

16 網と釣り針状の文様

赤穂ノ浦遺跡

銅鐸鋳型が出土した赤穂の浦遺跡、中国漢の青銅鏡が出土した宝満尾遺跡、大型掘立柱建物が発見された久保園遺跡などが、空港滑走路を挟んで真東に雀居遺跡と向かい合っています。

九州では、小型銅鐸やその鋳型が出土はありましたが、大型の本格的な銅鐸鋳型は、佐賀県唐津市の水田遺跡に次ぐ2例目で、これで北部九州で銅鐸が鋳造されていたことが確実になりました。

興味深いのは鋳型の型目です。3本の釣り針文様にかかっているのは魚ではなく、なんと魚の骨が彫り込まれています。弥生人は、この文様をどんな意味を込めたのでしょうか。この鋳型で作られた銅鐸が、どこかで使っているはずですよ。その場所も、文様の意味もぜひ知りたいものですね。

月隈天神森遺跡

空港滑走路の東南側は、くさび状に切り出された44基、木棺層24基の計68基からなる共同墓地で、近頃の墓制に並んでいます。人骨は残っていませんが、クワと銅鐸の小壺が供えられていました。小壺や墓槽の形から、弥生時代前期末から中期の墓地であることが分かります。

雀居遺跡にも同じ形制の墓制が確認できます。2列に並ぶような計画的な埋葬ではありませぬ。なぜかこの埋葬方法が異なっていたのか、それともムラがあったのか、人骨の性別もどうでしょうか。

下月隈C遺跡

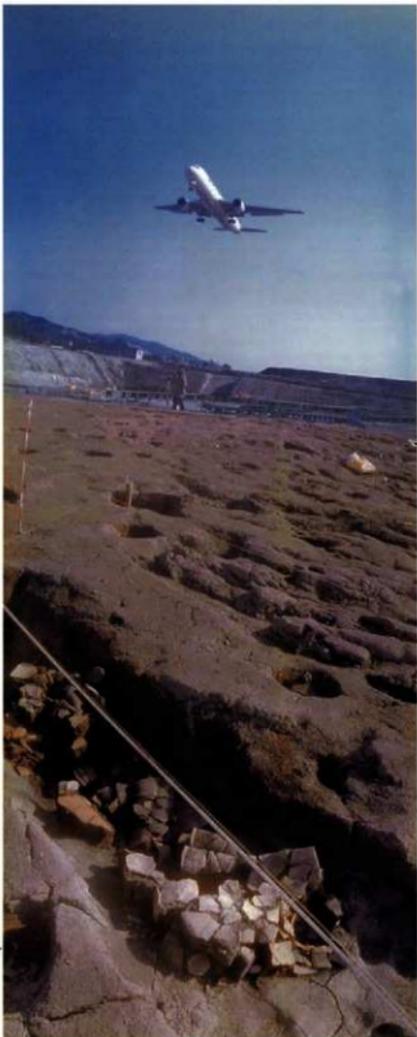
空港の調節池建設によって発掘が開始され、発掘をはじめ、現在も継続しています。

雀居遺跡と同じように発掘されて、弥生時代から中世までの集落や水田跡などが確認されています。特に、北に区画された水田の畦筋の方向は、北が南西に傾斜しており、雀居遺跡の水田方向とはほぼ一致しています。水田跡は畦筋が直線と溝から、木製品や建築材を数多く発見。畦筋は、発掘時に水田を返しが付いた高床式倉庫の床材が出土。畦筋は、土を乾かして水をよじ落とそうとするネズミを防ぐために、土を乾かして畦筋を造るのが普通ですが、なぜか1本の大きな木製釣り針が埋まっています。別々に作った方が、簡単だと思いませんか。

上月隈遺跡

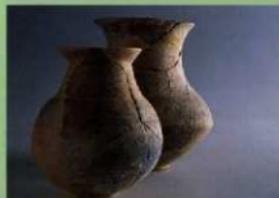
道路建設で発掘された弥生時代中期後半の墓槽から、人骨とともに、銅製の銅鐸、銅針1本が出土しました。福岡市埋蔵文化財センターで、発掘調査で、銅刻の刃部を矢羽根状に研ぎ分けた銅針が出土しました。太陽に当てると鮮やかに反射します。銅製の銅針は、人々も驚いたことでしょう。

銅針は、弥生時代は、銅製の銅針が出土されました。本来は人間を殺傷する武器でしたが、日本でも使われるようになると、次第に大型化し、武器としての機能を失い、研究分けは、前期の銅針にも認められ、銅製の銅針は、月隈遺跡の銅針は、ムラ長の権力誇示やムラの祭りに使われていたと考えられます。雀居遺跡でも、銅針の柄や飾り具が出土しています。





20 空から見た蘇威遺跡



19 木桶製に供えられていた壺
参照2-5-7

雀居遺跡は、このように全国的に有名な遺跡に取り囲まれています。各遺跡は、おそらく強い関係で結ばれていたことでしょう。米作りに大事な川の水は、上流や下流域を無視して、一人勝手に独占する事はできません。おそらくこの地一帯をまとめるリーダーがいて、お互いにルールを守ったはず。また年間を通して安定した食糧を確保したり、生活道具やその材料を手に入れるには、自分たちの狭い範囲では不可能です。たえずお互いに交流していたことでしょう。

周辺の遺跡を詳しく調べることによって、ムラ人の行動や物の流れ、生活風習などが分かってきます。

試掘調査(第1次調査)

運輸省第四港湾建設局は、福岡空港の利用客や貨物の急激な増加に対応するために、滑走路西側に国際線ターミナルと貨物ターミナルなどの移設整備を計画しました。

空港は、1944(昭和19年)に旧陸軍原田飛行場としてスタートしました。戦後は長く米軍の基地として立ち禁止地域となっていたために、一度も発掘調査されたことはなく、埋蔵文化財の空白地帯になっていました。そこでまず試掘を行うことにしました。

試掘は、空港西側整備対象地全域の39カ所にパワーショベルで細長い溝(トレンチ)を掘り、土の堆積状況や、どんな遺物がどの土層から出土するかを細かく観察し、記録します。この作業によって、遺跡の有無や年代、遺跡の範囲などをつかむことができます。また遺物や

遺構の時期や種類によって、住まいや墓、あるいは水田など、どのような土地利用であったかが分かります。

試掘の結果、空港の下に、洪水の砂で埋没した平安時代の村や水田があり、さらに下層では、弥生時代前期や早期(縄文時代晩期終末とする説もある。ここでは弥生時代早期と呼ぶ)の溝や遺物を発見しました。

飛行場建設で、古からのどかな田園風景は一変しているものの、逆に空港であったために最近の都市開発から守られて、遺跡が元の姿のまま土中にパック保存されていることが分かりました。

発掘によって、この地域の歴史だけでなく、日本における米作り開始期のような一気に明らかになるものと大いに期待されました。

土層は語る

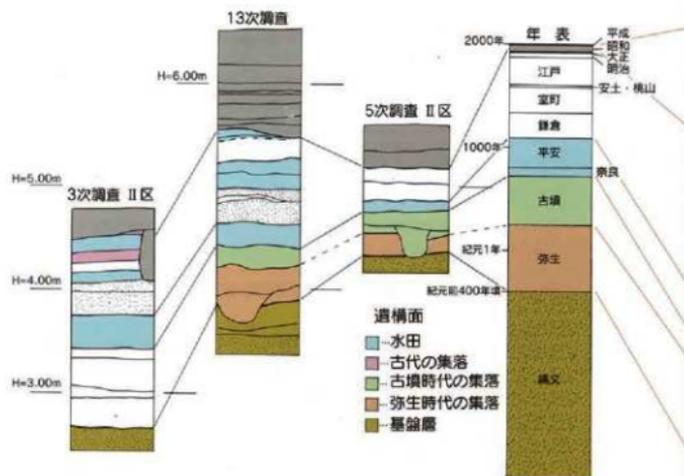
土層は、火山灰や洪水の土砂のように、自然現象だけで堆積したわけではありません。そこに住み着いた人間の手によって、整地や地上げが行われることもあります。火災の焼け土や灰で覆われることもあったでしょう。だから土層は、自然や人間の作用など土地の歴史を忠実に記録しています。

雀居遺跡の発掘地点を大きく分けると、国際線ターミナル(第2、3、6、8、11次)、燃料タンク用地(第7、9、10、12、13次)、自衛隊施設(第4、5、7次)の3カ所になりますが、下図は3地点の代表的な土層です。試掘で遺物、遺構が見つかった土層をそれぞれ対比、確認し、洪水などの自然現象の土層を検討して、共通する鍵になる土層を見つけます。

3カ所とも、水田耕作土と思われる土層が数層認められますが、そのどれもが薄い砂層に覆われています。水田耕作土と砂層が交互に堆積しているのは、洪水に幾度となく覆われても人々は逃げ出さず、砂層の上に耕作土を運び、水田を作り続けたことを示しています。

最下層には、弥生時代から古墳時代の遺物が多量に出土する層があります。弥生時代にはすでに人間が生活し、ムラがあったことは確実です。しかし北側の国際線ターミナルでは、該当する土層がありません。もともと存在しなかったのか、洪水がムラをも流したのででしょうか。

土層の観察によって、この地帯の歴史をある程度読みとることができ、その予想した歴史を実際の発掘で確かめます。作業の方法や工程を細かく組み立て、いよいよ掘り下げ開始です。



21 雀居遺跡の土層図

22 第13次調査区IIの土層

第2、3、6、8、11次調査 古代の集落

国際線ターミナルと駐機場に当たる部分を、平成3年から4次に渡って断続的に調査しました。

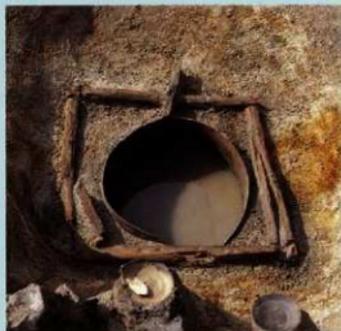
試掘では、生活や水田と思われる遺構面が現地表から約70cmと約110cm下で確認されたので、上から1面、2面と呼んで発掘を開始しました。

2頁の地図を見ると、席田飛行場建設前は、長方形に区画された水田が窟のように整然と並び、その所々に集落が点在しています。この風景が馬田という地名の由来になったと言われています。

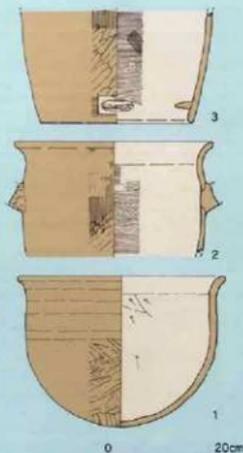
1面の発掘では、井戸、土塙(大きな穴)、溝、ピット(小さな穴)などの遺構が見つかり、平安時代終わり頃の10～11世紀に小さな集落が営まれていたと考えられます。出土した石鍋や土師器、中国製陶磁器、機織り具、建築部材、曲物などから、村の風景や農民たちの生活のようすを想像することができます。

注目したいのは、木の札に墨で文字を書いた木簡やお祓いに使った斎車です。第12・13次調査でも、斎車や人形、木簡が見つかっています。このような道具を使ったお祓いは、主に公共的な行事として執り行われていることから、もしかしたら近くに官遣や役所的な施設があったのかも知れません。

しかし広い範囲で焼灰が見つかっており、この集落は、火災に見舞われたことが分かります。間もなくさらに水害にも襲われ、短期間のうちに終わったようです。



23 第2次SE01井戸



24 井戸出土の遺物 (1/8)
撮影4-26



25 国際線ターミナル下の水田跡 (第6次 南東から)

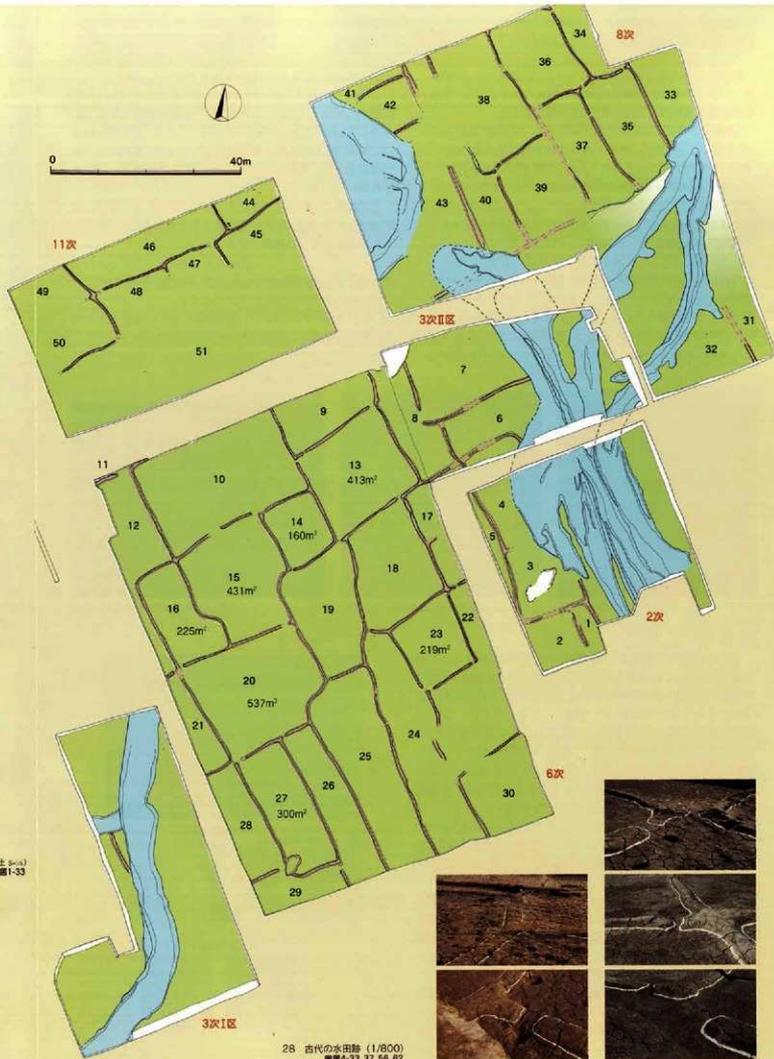
古代の水田

1面の集落跡の約40cm下で、平安時代はじめ頃、9世紀前後の水田と溝が洪水の厚い砂層に覆われて見つかりました。雀居遺跡ではこの他に、先に土層を示した燃料タンク用地でほぼ同じ時期の水田を確認しています。国際線ターミナル下の水田は、幅1m、高さ10cm前後の畦畔(あぜ)で区画されており、計51枚見つかりました。これらの水田は、形状・面積とも微妙に異なりますが、まず畦畔を幅約22mにN-25°-30°-Wの南北方向に平行に引き、東西方向の畦畔を約19m間隔で直交させて、長方形に区画しています。ただし畦畔の交差は、十字ではなくT字としているので、煉瓦積み状に南北列が互いにずれる区画となっています。なぜ十字にしなかったのか、本当の理由は分かりません。

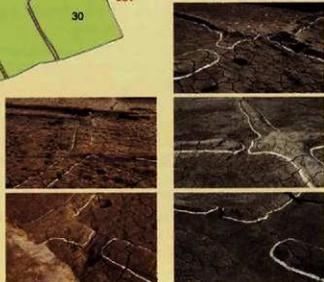


26 古代の集落跡 (1/500)
 撮影1-35、撮影4-43

また、畦畔がなぜ途中で切れています。これは水を取り入れる水口(取水口)と水を落とす水尻(排水口)です。近くで見つかった溝は、水田の水路として人工的に掘ったのではなく、自然の流れのようです。とすると現代の水田のように、用水路から直接に水を引き、用水路に排水する方法ではなく、標高の高い南側の水田から北側の水田に向かって順に1枚1枚配水したことになります。



28 古代の水田跡 (1/800)
 撮影4-33, 37, 56, 62



29 いろいろな水口

古代の水田 (第10、12、13次調査)

燃料タンク用地である第10・12・13次調査地点は、国際線ターミナルの建物から南に約350m離れています。ここでは砂層に厚く覆われた水田を計55枚発見しました。

11頁の土層図では、国際線ターミナル下の水田標高は約80cm低くなっており、時代が異なる可能性も考えるべきですが、両地点は350mと離れており、勾配率はそれ程大きくありません。福岡平野は北の博多湾に向かって傾斜しているため、同じ時代の水田の畦畔が、やや西に振れています。また畦畔は同じようにT字交差となっていますが、乱れは少なく、東西南北によく筋が通っています。さらに大畦と思われる幅広の畦畔が東西に貫通し、全体的に整った水田区画となっています。ただ長方形の各辺が短く、国際線ターミナルの水田跡に比べ

6割方狭い面積となり、小振りの印象を与えています。このような長方形区画が基本形と考えましたが、第12次では図示したように、さらに約20cm下で4枚の水田が見つかりました。幅は上部の水田とほぼ同じですが、長方形を南北に二分し、正方形に近い区画となっています。また西側の自然の流れから、浸食されないように、土を高く盛り上げて土手を築いています。

この場所だけに限ってのことですが、新旧を示す上下2面の水田からすると、基本区画は長方形ではなく、正方形であった可能性も考える必要があるでしょう。

おそらく、毎年のように襲ってくる水害で、地形や流れが変わるたびに、水田を作りかえ、流れを治めた結果、地点ごとに不揃いの水田になったと考えられます。

いわば不整形の水田こそ、自然災害に適応したムラ人の知恵や努力の結晶という見方もできるでしょう。



30 下月隈C遺跡第5次の水田跡



31 下月隈C遺跡第6次の水田跡



32 畦畔の断面(佐居遺跡・第12次)

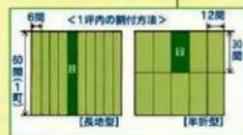
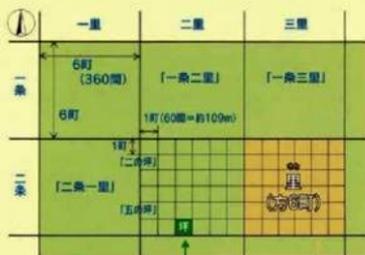
条里制

ところで奈良時代には、戸籍が作られ、性別、年齢に応じて耕作地(口分田)を与え、収穫した米を税として徴収する制度(班田制)が始まりました。このため全国の主な平野では、1町(60間=約108m)×1町の畦畔目状に区画(この方1町を坪と言う=3600坪=10反、方6町を里という)することになりました。方1町の中はさらに60間×6間か、30間×12間に細かく区画します。1里(方6町)の中にある36の坪には「一の坪」から「三十六の坪」のように地番がつけました。このような耕作地の区画整理とその制度のことを「条里制」と呼んでいます。

2頁の地図を見ると道路や水田の方向が、北より約36度西に傾いていることが分かります。これは条里制の名残と考えられ、佐賀大学の日野尚志先生によれば、福岡平野の条里制は大宰府水城を基線にして区画、施工されたと言われています。

佐居遺跡の近くでも「佐の坪」、「三十六」などの条里制に関わるような小字名が残っており、さらに下月隈C遺跡や下月隈溝越遺跡など周辺の発掘では、条里方向とほぼ一致する水田や溝が発見され、その出土遺物から少なくとも8世紀には、この地一帯に規格的に区画された水田が広がっていたと考えられています。

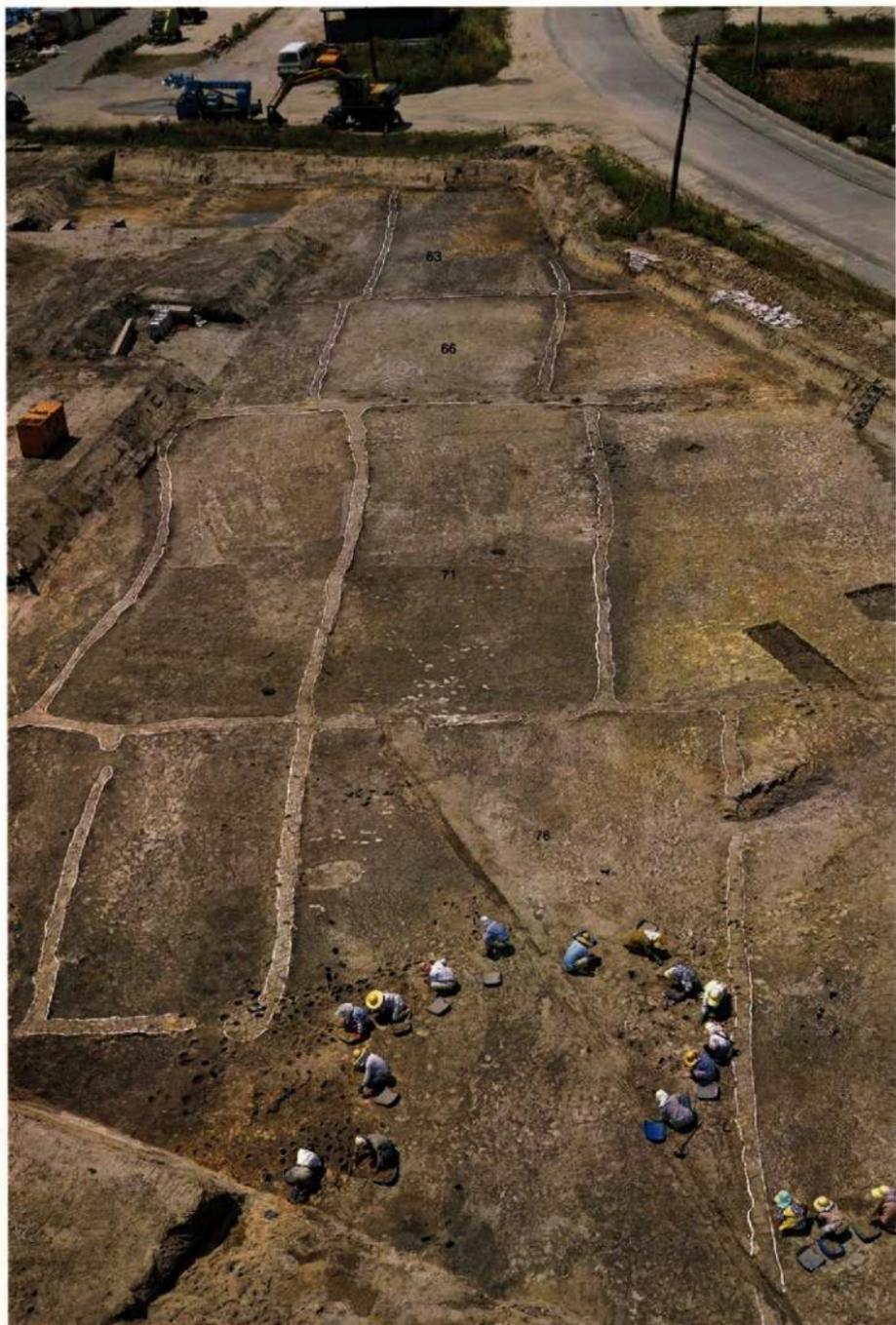
佐居遺跡の水田方向は、地点によって異なっていますが、条里方向と大きな矛盾はありません。しかし条里制の畷境や坪境を示すような水路や道などの明瞭な遺構は確認できず、今後の課題となりました。



<1畷内の坪番号配列方向>

1	12	13	24	25	30	1	7	13	19	25	31
2	11	14	23	26	35	2	8	14	20	26	32
3	10	15	22	27	34	3	9	15	21	27	33
4	9	16	21	28	33	4	10	16	22	28	34
5	8	17	20	29	32	5	11	17	23	29	35
6	7	18	19	31	31	6	12	18	24	30	36

【平畷型坪置】 【半形坪置】





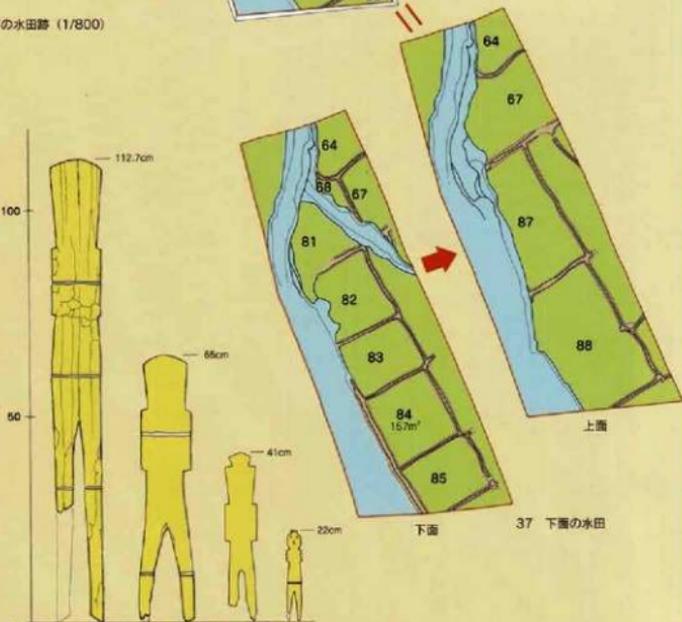
35 燃料タンク用地の水田跡 (1/800)

お祓いに流した人形

第10次調査の水田から思いもなしの遺物が出土しました。長さが65cmもあるので最初は農耕具の二又鎌と思いましたが、それは板の側面を削って人間の形を表した人形でした。福岡市内では、博多区高畑遺跡や下月隈C遺跡で発見されています。

古代では、このような人形は、子供の玩具としてではなく国家的なお祓いに使っていたので、都や地方の公共的な施設があった地域で発見されます。雀居遺跡の人形は、全長こそ半分ですが、奈良市平城京で発見された人形と細部の特徴がよく類似して瓜二つです。どう見ても、同じ人が作ったか、あるいは同じ型紙とか実物見本を側に置いて作ったに違いありません。よほどこの形でなければいけなかったのでしょう。

雀居遺跡のすぐ近くに、鴻臚館や大宰府、そして都をつなぐ官道があって、都から人形を持って大宰府に向かっていった役人が、それとも外国使節を送迎する役人が、道ばたの流れに人形を投げ込んだのではないかと、発掘作業の手を休めて、みんなで想像を楽しみました。

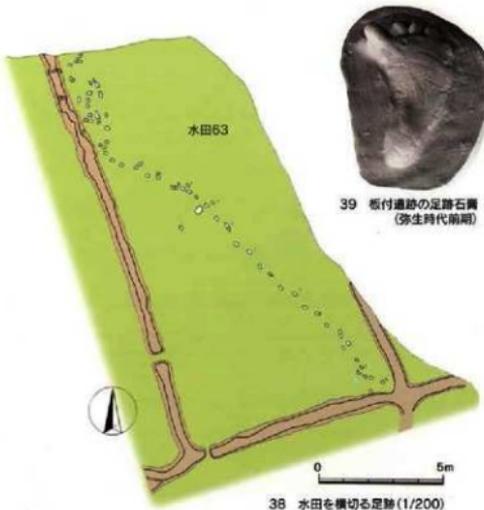


36 人形の肩比べ (1/12)

水田跡一覧表

東西に長い長方形を横長方形・南北に長い長方形を縦長方形とする

次	No.	形状	大きさ	水口	面積m ²	傾斜	次	No.	形状	大きさ	水口	面積m ²	傾斜	
2次	1	?	11.20×4.40	1	40+		54	縦長方形?			2	145+		
2	2	?	29.50×2.50	1	114+		55	縦長方形	10.50×8.10	0	81+	4.65		
3	3	?	10.50×14.50	0	186+		56	縦長方形	4.00×2.50	0	—			
4	4	?	9.20×6.00	1	188+		57	縦長方形	12.80×5.10	0	111+	4.62		
5	5	?	28.00×2.50	0	48+		58	縦長方形	9.00×4.80	1	33+			
6	6	?	11.50×21.20	2	192+		59	?	13.00×14.00	0	148+			
7	7	?	24.80×24.00	1	344+		60	?	7.50×1.80	0	11+			
8	8	?	26.00×10.00	2	204	3.95	61	?	22.40×11.40	0	122+	4.66		
3次	9	?	11.00×21.20	2	202+	4.05	10次	62	縦長方形	3.00×6.50	2	15+	5.10	
10	10	縦長方形	18.00×30.70	2	635+	3.95	63	縦長方形	19.80×8.80	3	159+	4.46		
11	11	?	0.50×8.00	1	39+	3.95	64	縦長方形	22.70×11.20	1	168+	4.44		
12	12	?	41.00×10.00	2	240+	3.95	65	縦長方形	12.40×9.95	0	87+	4.51		
13	13	?	18.20×19.50	5	413	4.11	66	縦長方形	12.35×9.40	2	126+	4.50		
14	14	方形	13.10×10.70	2	190	4.11	67	縦長方形	12.80×6.00	0	94+	4.61		
15	15	不整形	22.50×19.50	3	431	3.95	68	不明			15+			
16	16	不整形	21.00×11.60	3	225	3.95	69	縦長方形?			56+			
17	17	?	21.30×17.00	1	111+	4.03	70	縦長方形	21.65×9.70	1	195+	4.50		
18	18	不整形	20.90×17.50	3	375	4.00	71	縦長方形	21.60×9.20	2	192+	4.46		
19	19	不整形	23.00×16.20	6	338	4.05	72	縦長方形	21.80×7.50	1	159+	4.42		
20	20	不整形	21.70×25.10	5	537	4.04	73	縦長方形	21.70×7.15	2	128	4.38		
21	21	?	21.30×5.90	1	93+	3.97	74	縦長方形?	30.00×8.00	0	58+	4.60		
22	22	?	32.80×16.70	2	321	4.15	75	縦長方形	20.40×4.00	0	156+	4.53		
23	23	不整形	14.50×13.80	4	219	4.10	76	縦長方形	20.20×11.40	2	182+	4.52		
24	24	不整形	48.00×10.40	3	455+	4.10	77	縦方形	11.00×5.30	2	56	4.45		
25	25	不整形	41.00×14.50	1	518+	4.08	78	縦方形	13.80×10.00	3	119	4.48		
26	26	縦長方形	34.00×7.20	2	278+	4.10	79	不明	3.50×7.20	3	13+	4.42		
27	27	縦長方形	26.60×10.90	2	300	4.15	80	不明	30.00×12.00	1	—	4.53		
28	28	?	23.30×8.10	2	188+	4.10	81	不明	13.20×12.50	0	15+	4.53		
29	29	?	7.70×18.50	2	126+	4.27	82	方形	12.35×10.00	0	127+	4.58		
30	30	?	19.00×17.00	0	229	4.15	83	方形	4.40×12.30	0	115+	4.47		
8次	31	?	13.40	0	75+	3.95	84	方形	12.45×12.00	0	167	4.38		
32	32	?	13.40	0	195+	3.99	85	方形	9.90×12.50	1	125+	4.32		
33	33	縦長方形	20.00×8.50	2	164+	3.98	86	不明	4.00×9.00	0	22+	4.28		
34	34	?	0.50×8.00	1	100+	3.95	87	不明	21.30×11.80	0	239+	4.74		
35	35	縦長方形	41.00×10.00	2	276+	3.95	88	縦長方形	23.20×13.90	1	284+	4.95		
36	36	縦長方形	18.20×19.50	5	268+	4.11	89	不明	11.20×13.00	1	40+	4.78		
37	37	縦長方形	13.10×10.70	2	249+	4.11	90	不明	9.00×11.00	0	86+			
38	38	縦長方形	21.70×25.10	5	392+	4.04	91	不明	13.80×8.50	0	46+			
39	39	縦長方形	21.30×5.90	1	271+	3.97	92	不明	5.30×9.50	0	58+	4.65		
40	40	不整形縦長方形	32.80×16.70	2	285+	4.15	93	不明	5.00×12.50	1	74+	4.59		
41	41	?	14.50×13.80	4	39+	4.10	94	不明	8.00×9.30	1	64+	4.58		
42	42	方形	48.00×10.40	3	104+	4.10	95	縦長方形?	2.80×8.00	3	31+	4.69		
43	43	縦長方形	41.00×14.50	1	410+	4.08	96	縦長方形?	15.50×9.00	1	361+	4.75		
11次	44	?	6.70×13.80	0	74+	3.77	97	縦長方形?	24.10×16.10	1	351+	4.76		
45	45	?	6.40×17.00	0	96+	3.81	98	縦長方形?	22.50×11.50	1	278+			
46	46	?	8.10×31.50	0	247+	3.79	99	不明	22.60×5.50	1	117+			
47	47	?	6.50×11.70	0	71+	3.75	100	縦長方形	11.80×16.30	0	163+	4.75		
48	48	?	10.00×16.00	0	119+	3.78	101	不明	11.30×3.50	0	30+	4.71		
49	49	?	9.00×2.50	0	123+	3.84	102	縦長方形?	18.00×13.30	0	227+			
50	50	?	10.80×15.20	0	148+	3.74	103	不明	12.00×3.50	0	43+			
51	51	?			—		104	不明	1.70×10.00	0	17+	4.80		
13次	52	?	7.95×8.90	0	75+	4.62	105	不明	5.50×1.20	0	8+	4.87		
53	53	欠番		0	—		106	不明			—			



足跡から推理する

水田には無数の足跡が残っています。洪水の砂が水田を覆う時、泥にめり込んで窪んだ足跡にも砂が入り込んだでしょう。昭和53年に「縄文水田発見」と報道された板付遺跡第30次調査では、指の1本1本まで観察できる弥生人の足跡が見つかりました。水田に残された足跡は、おそらく田植えとか稲刈りとか農作業のようすを伝えているはずです。

那珂岩休遺跡の水田では、畦に向かって蟹のように横歩きしている足跡が並んでおり、田植え前の畦塗りの農作業を想像しました。もし農作業が分かったら、足跡が埋没した洪水の季節も推測できそうです。

ところで第10次調査では、水田63を斜めに横切る足跡が見つかりました。約50cmの歩幅は、慌てたのかやや蛇行しながら南東に向かっていました。他に足跡はなく、農作業とは思えません。もしかしたら大雨で溝の水量があふれそうになり、水田を守ろうと急いだのでしょうか。

第4・5次調査の概要

国際ターミナル建設予定地にあった自衛隊施設が移動することになり、その新しい移転先を第4次調査として平成4年10月から発掘しました。試掘では、小さな集落があると予想されていましたが、弥生時代早期～古墳時代前期の溝や大型竪立柱建物跡などの遺構と木製農具、漆製品、組み合わせた式机など、私たちが初めて目にするような素晴らしい遺物が出土しました。深い湧水に悩まされ続けていた発掘でしたが、予想以上の成果が上がり、学界やマスコミの注目を集めました。

遺跡はさらに東側の滑走路に広がっていることから、翌年も第5次として発掘を続けました。特に弥生時代後期の溝が円形に巡って集落を囲む環溝になる可能性が強く、その環溝の規模や大型竪立柱建物跡との関係、弥生時代早、前期の木製農具や漆製品が出土する溝の延長部確認などが主な目的でした。溝は楕円形の環溝となり、さらに大型の竪立柱建物跡が見つかりました。

第4、5次調査については、すでに調査報告書が発行されていますが、ここでは、古墳時代、弥生時代後期～中期、弥生時代前期～早期に分け、各時代の遺構、遺物と調査成果を紹介します。



41 毎朝水没してしまう発掘区





42 第4次調査区全景



43 第5次調査区全景

古墳時代

古墳時代の遺構として、竪穴住居跡、溝、土塼、掘立柱建物跡が見つかりました。

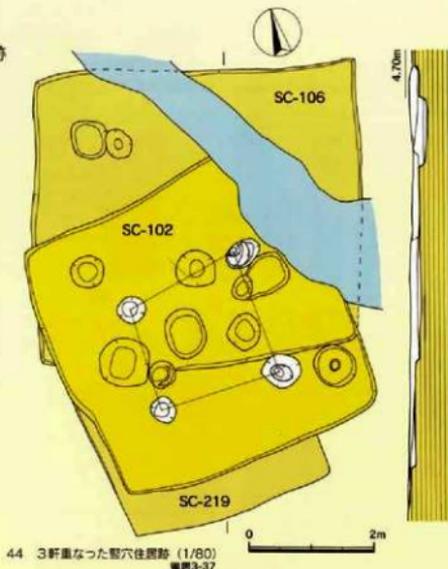
竪穴住居跡

竪穴住居の構造は、地面を円形や方形に掘り下げ、床に掘った穴に柱を立て、壁を作らずに屋根を地面に直接置き降ろします。屋根や柱材は残っていませんが、発掘によって住居の形や柱の本数、また出土遺物によって、内部の利用方法や居住した期間が分かります。さらに集落を構成する軒数や配置、面積などによって、集落の大きさや人口などを推測することができます。

発掘では、図のように建て替えて重なっていることが多いので、同時期に何軒建てていたかをつかむことは簡単ではありません。しかし重なっていること（切り合い関係とも言う）によって、住居やそこから出土する遺物の新旧、先後関係を明らかにすることができます。

4、5次調査では、8軒の竪穴住居跡（うち1軒は弥生時代）を発見しました。その分布状況から推測すると滑走路側さらに広がっているようです。

北西に300m離れた燃料タンク用地（第7、9、10、12、13次調査地）の微高地でも、弥生時代から古墳時代の集落が発見されていることから、当然のことですが、この一帯では洪水の災難を受けにくい微高地を集落地として選んでいます。古墳時代前期には、出土遺物の量が増え、またその出土範囲も広がることから、集落が大きくなったことが分かります。しかし、古墳時代中期には、竪穴住居跡も遺物もすっきり姿を消してしまいます。その理由は明らかではありませんが、また洪水が集落を襲ったのでしょうか。それとも水田など土地利用が変わり、別の場所に移動したのでしょうか。



44 3軒重なった竪穴住居跡 (1/80) 遺跡3-37



45 竪穴住居跡 遺跡3-PL.12

古墳時代竪穴住居跡一覧表

略号	時期	形状	大きさ m	面積 m ²	主柱数	備考
SC-193	弥生中期前半	隅丸長方形	3.5×5.4	21.71	4?	弥生前期の土塼SK-172の上にある
SC-102	古墳前期	隅丸方形	4.4×4.5	22.4	4	重なった3棟では最も新しい
SC-106	古墳前期	隅丸方形	4.6×5.2	25.97	?	SC-102の下 土師器の小破片のみ
SC-115	古墳前期	隅丸方形	5.5×6.1	35.36	2	ベッド状遺構がある
SC-140	古墳前期	隅丸長方形	(2.65)×4.87	14.40		SC-115より古い
SC-143	古墳前期	隅丸長方形	4.1×4.8	20.37	4+	
SC-145	古墳前期	隅丸長方形?	不明	—		SC-143より古い
SC-219	古墳前期	隅丸長方形?	不明	9.76+		

隅丸というのは、隅が直角ではなく、丸みがあるという意味です。

弥生時代後期～中期

遺跡の基盤となる土層は、その遺跡の場所によって異なります。雀居遺跡の基盤は、御笠川の氾濫で堆積したと思われる灰色の砂層や膏みを帯びた灰色粘質土です。この調査区では、基盤層の灰色砂層の上に黒色砂質土が堆積し、弥生時代から古墳時代の遺構や遺物が出てきます。発掘作業では、この土層の上面を丁寧に削り、色や質の変化に注意しながら遺構を見つけます。遺構は、人間の手が加わっているため、その部分だけが周囲の土と異なっています。土器や石器などの遺物も、この遺構部分だけに入っているので見分ける手がかりになります。

しかし雀居遺跡では、生活面の土層が遺構の色と同じ黒色であり、古墳時代と弥生時代とを分ける土層が間に堆積しているわけではないので、遺構を年代ごとに区別しながら検出することは、容易ではありません。何度も何度も地面を削り、検出作業を繰り返した結果、弥生時代後期から中期の遺構として、竪穴住居跡、墓館墓、溝、掘立柱建物跡、土塼などの遺構を見つけました。

竪穴住居跡と墓館墓は、わずかに1基のみですが、2回の発掘によって溝は、集落を囲む環溝となり、その内側には大型の掘立柱建物が建ち並んでいることが分かりました。

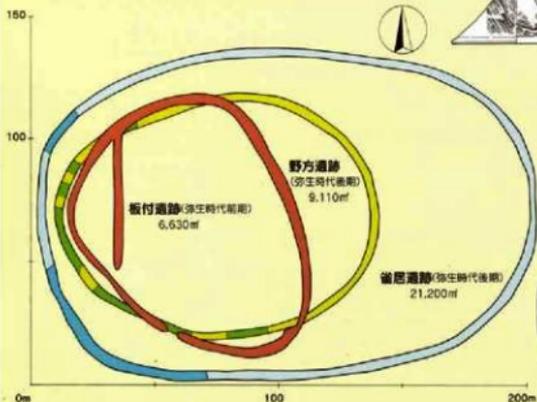
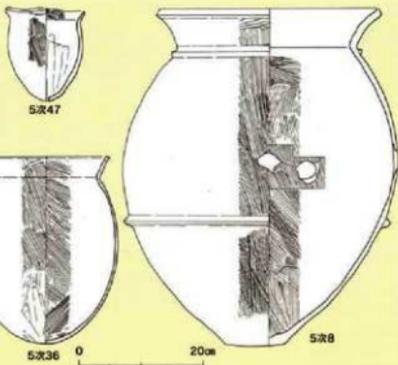
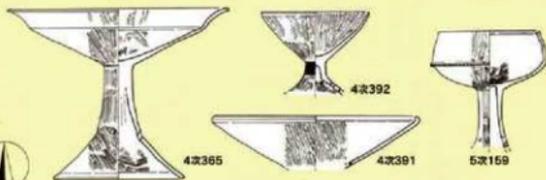
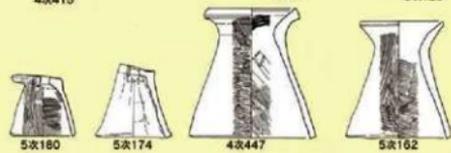
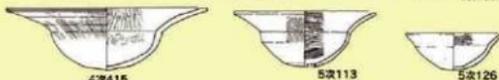
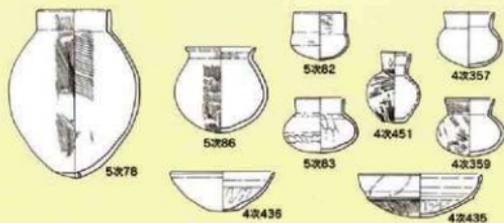
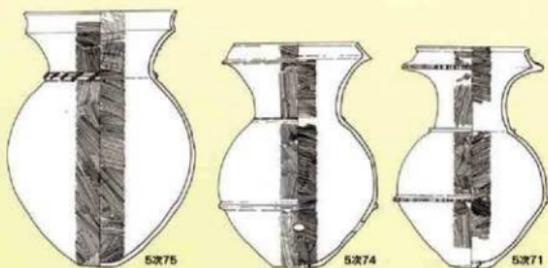
内外の航空機が飛び交う空港の下に、弥生時代の環溝や大型掘立柱建物が眠っていたというだけでも驚きですが、感動はそれだけではありませんでした。大量の弥生時代後期の土器に混じって、貴重な遺物が続々と発見されたのです。



環溝

第4次調査で発見したSD-02溝は弥生時代後期の溝です。弥生時代早期～前期のSD-03溝と重なり、また古代以降の新しいSD-01溝で切られ、その両端がどこまでのびるのかわかりませんが、第5次調査によって両端が次第に内側にカーブして東の滑走路側にのびていることが確かめられました。幅3～5m、深さ1m前後、断面はU字形で、明らかに人間が掘った溝です。検出したのは南北115m、東西40mですが、そのカーブからすると東西約200m、南北約130mの東西に長い楕円形と推定されます。掘立柱建物跡をはじめ大部分の遺構が、この溝の内側にあることから、集落を囲む環溝である可能性が強まりました。

村や街を溝や堀で取り囲んだ例として、大和平野の埴内集落や堺の自治都市が知られていますが、日本の歴史からするときわめて珍しいことです。しかし弥生時代には、全国各地で環溝集落が出現しています。もちろんどのムラも環溝集落だったわけではなく、板付遺跡のように、その地域の拠点、中核的な役割を果たした主要なムラだけが選ばれているようです。環溝は、ムラを守る防衛的な役割と思われるのですが、いろんな説があり、まだ十分に解明されていません。

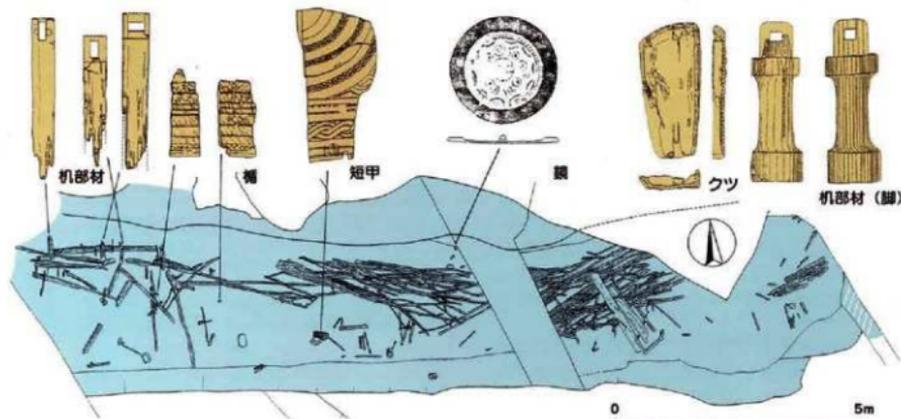


47 環溝の大きさ (1/2,000) ※角線で確認した部分の色を濃くした。

48 環溝出土の土器 (1/8)
 竪穴2-53-62
 竪穴3-69-106

環溝の遺物

環溝からは大量の土器と共に、多様な遺物が出土していますが、場所によって、遺物の種類や出土状況に違いが見られます。おそらく環溝内部の土地利用の違いや自然環境を反映していると思われます。下図の部分では、径5cm前後の自然木が横倒しになっており、その下から中国の青銅鏡を真似て日本で鍛造した青銅鏡、木製のクツ、大小の組み合わせ式机、木製短甲と楯など興味深い遺物が出土しました。自然木の根本は、環溝の内側を向いていることから、環溝の内側縁に並んでいた雑木が強風でなぎ倒されたと推測されています。



49 環溝の遺物出土状況 (1/100)
 編年3-74



50 短甲の復元図

51 木製短甲と楯 (1/4)
 編年3-79

細かな文様は強さの象徴

短甲は柿材を削り出して作っています。外面には強さを表すような弧帯文や鋸歯文などで飾り、さらに褐色の顔料(柿渋か)を塗って敵を威嚇したのでしょう。木製で、しかも薄手の作りなので、どれ程役立ったのが疑問です。調査担当者は、実戦用ではなく、祭祀に着用した可能性も考えています。

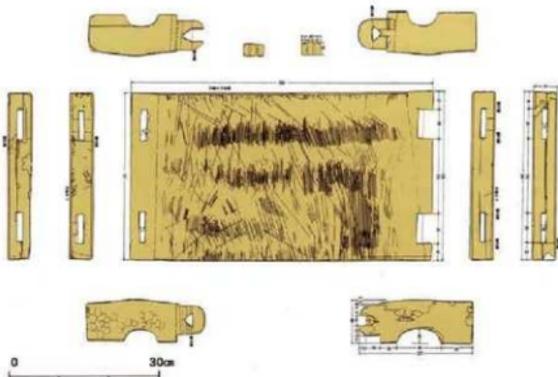
楯は破片なので全形が分かりませんが、モミ材が用いられ、全面に小さな孔が平行に並んでいます。敵側を向く表には黒漆を、裏には赤色顔料を塗り、孔には紐を通して補強と装飾をしたのでしょう。赤色や黒色は、敵を恐れさせるだけでなく、味方の勇気を鼓舞する意味があったとも言われています。

確かな木工技術

小型机は、年輪のよく詰まった杉の柾目材を使っています。濡れた状態で発見されたことから、その組み合わせ方法が初めて明らかになりました。また年輪によって年代を測定する方法がありますが、天板は西暦41年、脚は西暦87年の結果が出ました。「倭国大乱」は、西暦2世紀後半の出来事なので、年代的にはやらずれています。



52 押し濡れた状態で発見された机



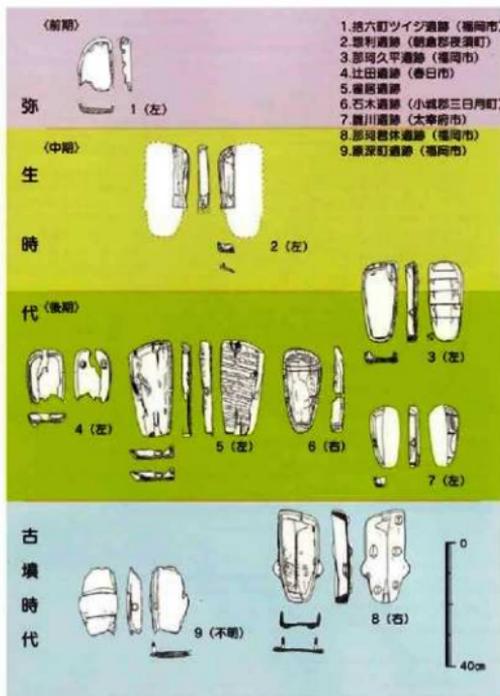
53 小型机の展開図 (1/10)
西暦2-186



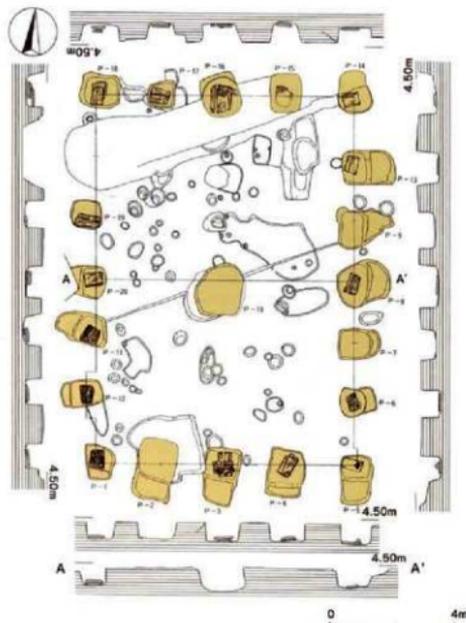
54 復元した大小二つの机

歩行用でないクツ?

木製クツは、佐賀、福岡両県で出土例が報告されています。その足底には、滑り止めの加工があります。側面の穴に紐を通し、しっかりと足に固定したのでしょう。歩行用ではなく、滑りやすい低湿地での作業や葦切りなどに履いて、切り株から足を守ったと想像しました。



55 弥生時代クツ (1/16)



56 SB-222 竪立柱建物跡 (1/160)
 縮尺3/66

竪立柱建物跡

竪穴住居も竪立柱建物も、その柱は地面に掘った穴に入れて建ち上げますが、大きな違いは竪穴住居が地面を掘り下げて床とするのに対し、竪立柱建物の多くは現代の家屋のように床が地面より上に離れていることです。弥生時代には、保温性や防湿性などそれぞれの特性を巧みに利用して竪穴住居を住まいに、竪立柱建物を倉庫として使い分けています。

第4、5次調査では、表のように31棟(うち2棟は古墳時代の)竪立柱建物跡を確認しました。ほとんどの柱間隔が1間×1~3間で、面積24㎡以内ですが、SB-50とSB-222の2棟の竪立柱建物跡だけは、際だった大きさです。特にSB-222は、4間×6間、面積102.3㎡、直径30~40cmの大きな柱が使われ、中央には、棟を支える棟持ち柱が立っていたと推測されます。

最近、西日本各地の弥生時代遺跡で、大型竪立柱建物の発見例が増えています。100㎡を越し、柱も大きいことなどから、住まいや倉庫ではなく、宮殿や神殿と推測されています。SB-222も同じような大きさであることから、特別な建物だったと考えられます。ただ2棟とも環溝の中心ではなく、環溝に接近して建っているのは、環溝とが物見櫓のように内外からの眺望や威圧、あるいは監視などの効果、演出を狙った建物だったのでしょうか。とすると環溝の中心部には、もっと大型の建物があった可能性があります。

竪立柱建物跡一覧表(弥生時代後期後半)

4次

No.	大きさ				備考
	間×間	長さ	桁長	面積㎡	
SB-07	1×1	3.45	2.60	8.97	SC05住居跡をもち
SB-09	1×1	2.10	3.15	6.62	I区SD007で見つかる
SB-47	1×2	3.44	4.64	15.96	
SB-48	2×2	4.70	4.90	23.03	
SB-49	1×1	4.06	4.52	18.35	
SB-50	1×3	7.00	9.00	63.00	棟持ち柱
SB-51	1×1	3.44	3.98	13.69	
SB-52	1×2	3.15	4.00	12.60	
SB-53	1×2	3.60	5.00	18.00	
SB-54	1×2	4.18	4.20	17.56	
SB-55	1×2	2.74	3.52	9.64	古墳時代前期
SB-56	1×2	3.50	5.70	19.95	
SB-57	1×2	?	5.25	—	SB-56に切られる
SB-58	1×2	4.22	5.30	22.37	
SB-60	1×2	3.42	4.94	16.89	
SB-61	1×2	?	4.20	—	南壁は未確認
SB-62	1×2	3.20	?	—	北壁は未確認
SB-63	1×2	?	6.09	—	
SB-64	1×3	4.60	6.55	30.13	
SB-65	1×2	3.50	4.30	15.05	古墳時代前期
SB-66	1×1	3.40	3.85	13.09	II区SD-03内で検出
SB-67	1×3	3.85	6.25	24.06	
SB-68	1×1	3.20	3.65	11.68	SB-67-69-70と重複
SB-69	1×2	2.70	4.40	11.68	
SB-70	1×1	3.30	3.45	11.38	

*SB65-65は古墳時代前期

第5次

SB-222	4×6	8.40	12.18	102.31	棟持ち柱
SB-225	1×2	4.32	4.80	20.74	竪溝
SB-226	1×3	4.93	2.29	11.29	SB-225と一部重複
SB-227	1×1	—	—	—	竪穴住居跡
SB-231	1×2	3.40	2.00	6.80	SD-001に切られる
SB-232	1×2	4.80	4.80	23.04	転用柱の遺構



57 各地の竪立柱建物跡 (1/1000)

弥生時代前期～早期

雀居遺跡の集落は、古代を除くと弥生時代早期から古墳時代前期まで絶えることなく存続しているように見えますが、遺構、遺物の数量変化を年代的に見ると、古墳時代前期、弥生時代後期、そして弥生時代前期～早期に増大しています。もちろんこの三つのピークは、発掘した場所に限っての傾向であって、もしそれ以外の場所で発掘すると、ピークの間集落が見つかるかも知れません。洪水に見舞われやすい場所だけに、集落適地を探して移動を繰り返していたはずで

いずれにしても雀居遺跡で人間の活動が始まる弥生時代早期には、集落が数か所で同時に形成されていますが、これらの小さな集落を一か所に集めるような広い面積を確保できなかったために、小規模のままで点在し、拡散する結果となったようです。

第4、5次調査で確認した遺構は、土壇、溝のみで、住まいであった竪穴住居跡は確認できませんでしたが、遺物の種類と出土量は、この時期の人々の逞しい開拓魂と旺盛な生活力を強く反映しています。

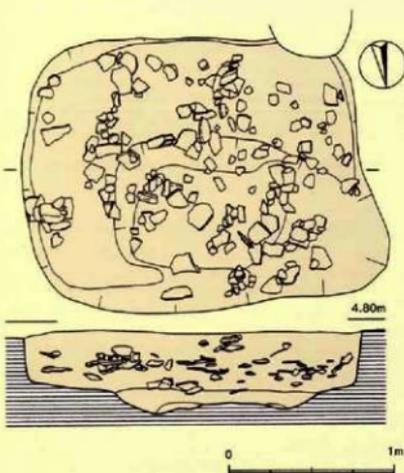


土 壙

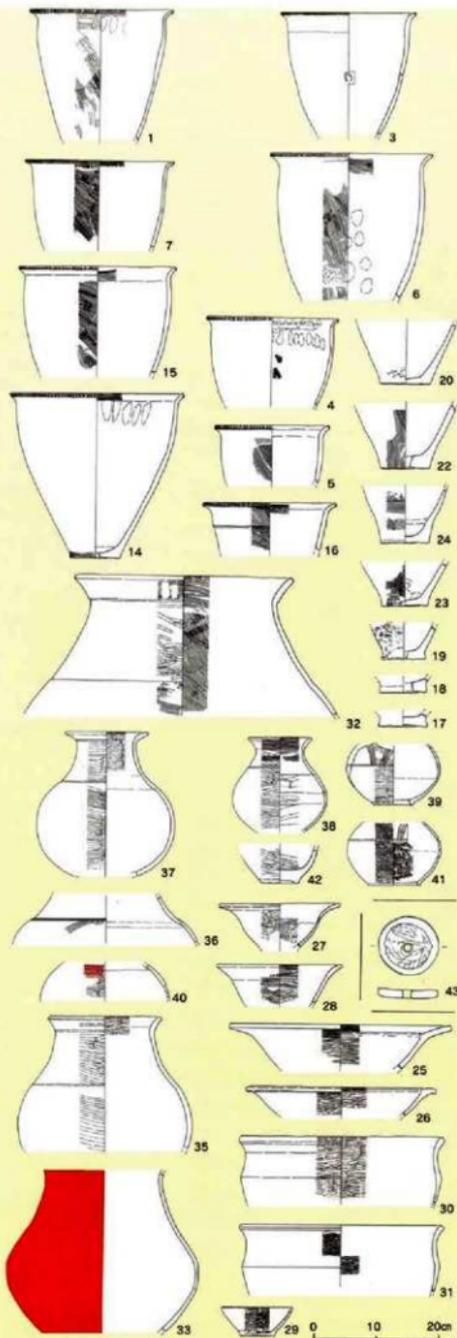
やや大きめの穴を土壙と呼んでいます。この調査区では、32基発見しました。人間が掘り穿めたのではなく、自然にできた穴の場合もあり、簡単に区別できません。また人間が掘った土壙であっても、当初の用途はなかなか分かりません。大半の土壙からは、遺物が出土しますが、ゴミのように捨てられた場合もあるし、自然に埋まった状況を示すこともあります。でもゴミは、食事や生産など人間のあらゆる活動から不用となり廃棄されたものなので、ゴミを調べることによって当時の食生活や生産活動、そして道具や持ち物などを具体的に知るができます。考古学にとってゴミはまさに宝の山というわけです。

SK-188土壙は、もとは食べ物や種粉などを貯える目的で使用した貯蔵穴と思われるのですが、最後は土器片が多量に廃棄されて役目が終わっています。これらの土器は、弥生時代前期に作られた土器で、板付式土器と呼ばれています。食べ物や種子など大事なものを入れたり保存するための容器であった壺、湯を沸かしたり米の煮炊きに使った甕、そして繊維に摺りをかけて糸にする紡錘車もあります。

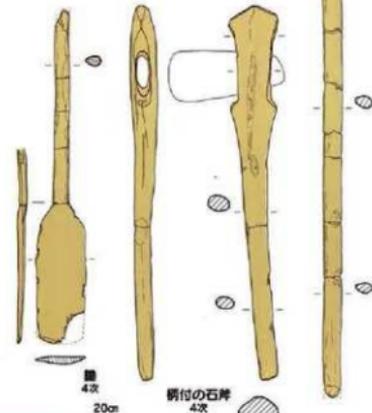
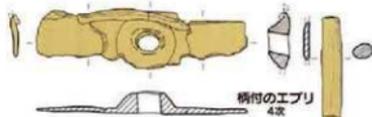
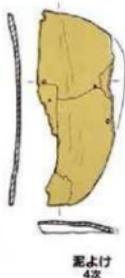
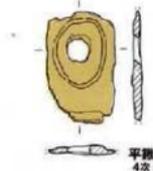
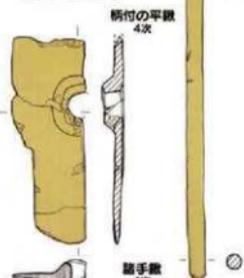
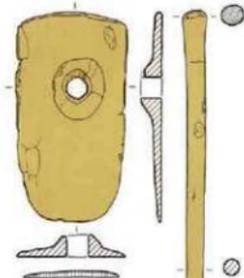
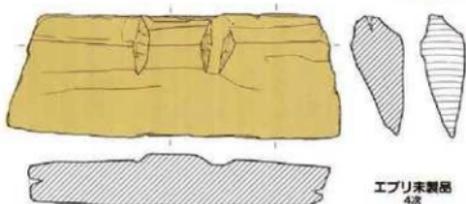
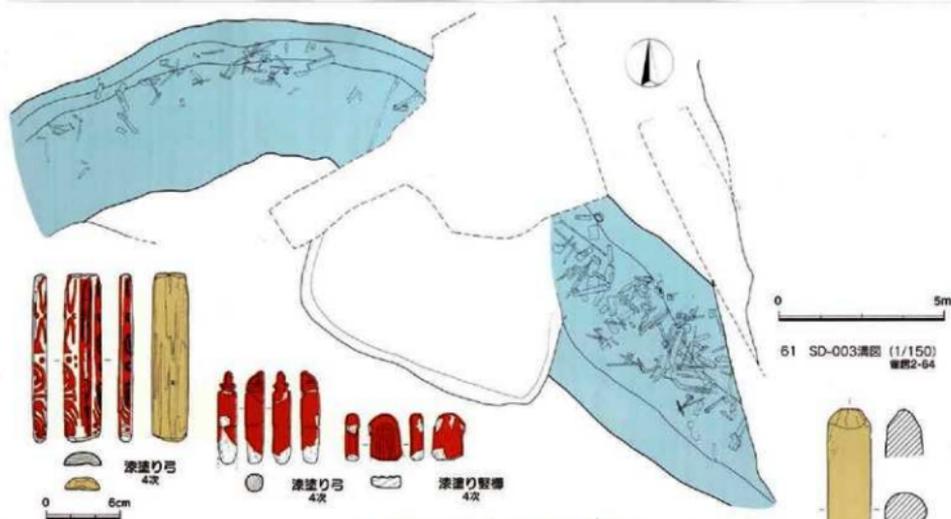
これらのすべてが一家族あるいは一人の持ち物であったとは思えませんが、当時の土器の種類(器種)とその組み合わせが分かり、また土器作りや糸作りの技術を知ることができます。文様を赤く彩色した土器からは、ムラ人の美に対する思考、精神性や芸術的センスをも窺うことができます。



59 SK-188土壙図 (1/30)
遺跡3-23



60 土壙出土の遺物 (1/8・1/4)
遺跡3-26~28



0 20cm



溝

環溝、大型掘立柱建物跡と並んで学界やマスコミの注目を集めたのが、SD-003溝から出土した数々の木製品です。SD-003溝は、環溝と逆に南側にカーブしています。その両端は発掘区外にのびていますが、微高地の縁を巡る自然の流路と考えられます。南側に向かって徐々に深くなり、南端は溜まり状に窪んでおり、この部分に木製品や土器などが厚く重なり合っていました。

石器や土器は、長く土中にあってもほとんど変化することがありません。だから発掘でもっとも多く出土します。一方、金属器や木製品、そして衣服や食糧などは、錆びたり、腐食してしまうので発見されることはまずありません。ただ木製品は、深い土中で低温の水があり、腐敗菌が遮断されるなどの条件が揃うと、当時の姿のまま保存されることがあります。低湿地にある雀居遺跡は、まさにその好条件を備えていました。

出土した木製品は、鎌、鋤、エブリなどの農耕具、整杆、横槓、斧柄などの加工具、弓、刺装具などの武具、槽、高杯などの生活具、そして建物の部材など多くの種類があります。漆を塗って美しく飾った木製品も含まれていました。当時の米作りや日常の生活が、予想以上に高度な技術と豊富な種類の道具で行われていたことが分かりました。また鎌打具は、日本最古の織り具として大きく報道されましたが、民俗例やこれまでの発掘例で目にしていない形状だったため否定する意見も出されました。

木製品のほとんどが完形品であり、しかも柄と鎌や磨製石斧が組み合っているなど、つい先ほどまで使用していたような姿であることから、急な出水に襲われ大事な身の回りの道具すら持ち出せなかったと考えられています。

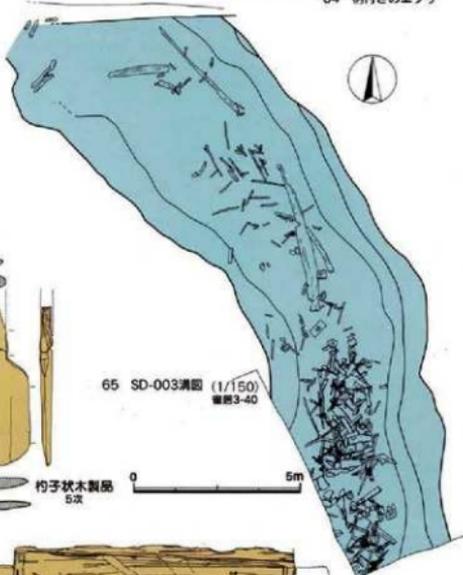
これら未報告になっている木製品は、現在実測、撮影などの整理作業を進めており、平成14年度に「雀居遺跡 7」で報告する予定です。



63 柄が付いたままの石斧



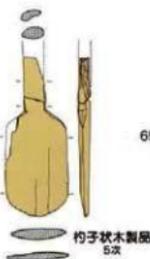
64 柄付きのエブリ



65 SD-003溝図 (1/150)
巻紙3-40



66 柄手付槽
4次



68 杓子状木製品
5次



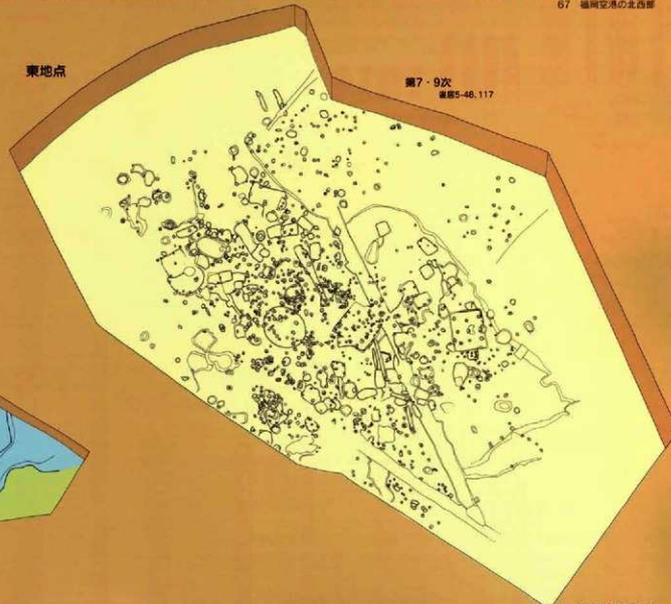
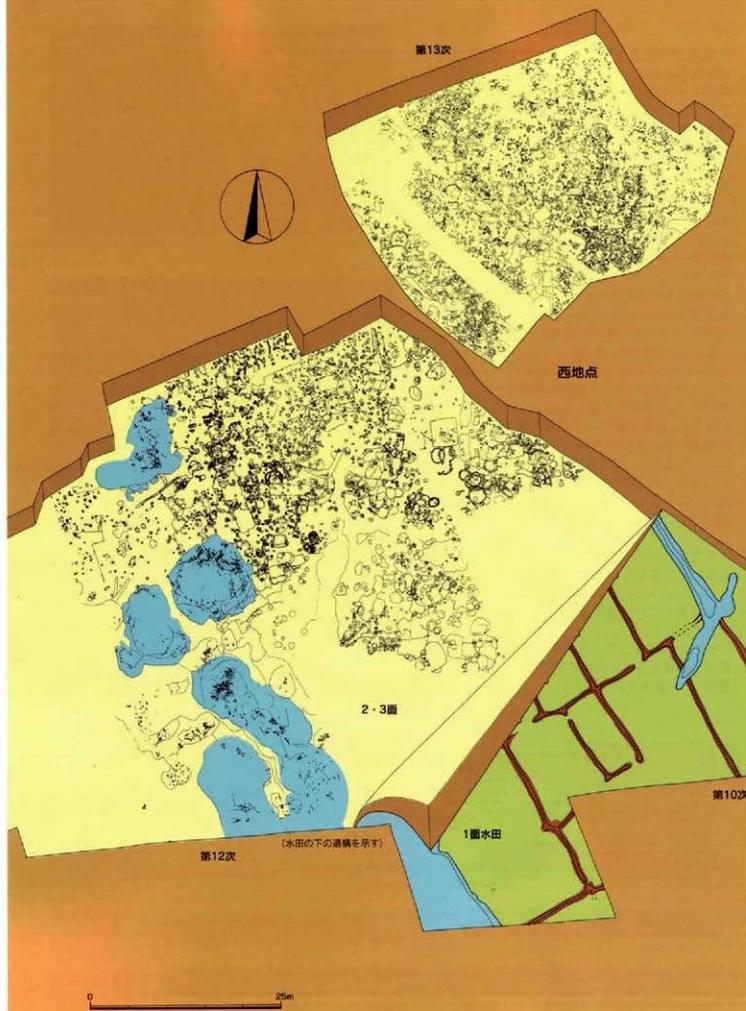
69 磨り具
5次



70 磨り具 5次



71 磨り具 5次



66 燃料タンク用地の遺構全体図 (1/500)

第7、9、10、12、13次調査

約22,000㎡の調査区は、グラウンド用地の第7、9次と、燃料タンク用地の第10、12、13次の東西2地点に分かれています。この周辺も他の調査地点の地形と同じように、どちらも集落が始まる弥生時代早期以来、洪水などによって凹地や新しい流れができるなど、絶えず自然作用を受けて地形が変化しています。ムラの立地、生活空間に運した場所とはとても思えません。私たち現代人だと、すぐに逃げ出したことでしょう。

しかし雀居遺跡の中では、この調査地が最も大量に遺物が出土し、遺構も濃く密集していることから、断続的に集落が営まれたことが分かります。生活面となった黒色粘土質の土層も比較的厚く堆積しており、ある程度安定した地域であったことも考えられます。

5次を重ねた発掘の結果、雀居遺跡では初めて弥生時代前期の竪穴や弥生時代中期の掘立柱建物跡群が見つかりました。凹地からは木製品も多数発見され、弥生時代から古墳時代に至る木製品の変化をたどることが出来ます。さらに家畜小屋と思われる遺構も加わるなど新しい知見を得て、平成10年12月に発掘を完了しました。

第4、5次調査と合わせると、弥生時代早期から古代に至る雀居ムラの風景やムラ人たちの暮らしぶりを「見てきたような」作り話ではなく、「実際に見てきたように」生き生きと語ることができるようになりました。

なお古代の水田跡については、17頁に記しているのので、それ以前の遺構について年代を逆に遡りながら紹介します。





70 燃料タンク用地 第12次調査区(西から)



71 グランド用地 第7,9次調査区(東から)

古墳時代の遺構として、前期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壇、溝、井戸など、集落に関する遺構を検出しました。この他に斜面には、大量の土器が積み重なって土器溜め状になっており、また自然にできた凹地では、湧水に保存された木製品が数多く出土しました。

竪穴住居跡

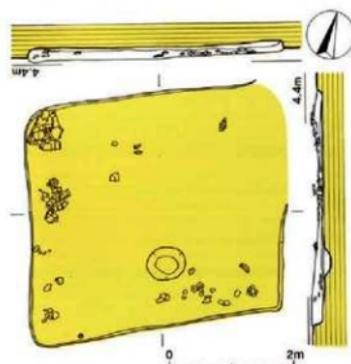
古墳時代の竪穴住居跡は、西地点で2軒、東地点で7軒の計9軒見つかりました。斜面にできた土器溜めが、東、西地点の間を南から北にのび、さらに東地点を取り巻いていることから、東西に二つの微高地があったようです。東地点は、62m×48mの楕円形で、面積は約4,000㎡です。その標高は、現在の検出面より1m程高かったと推測しました。本来の深さが1mに近い竪穴住居跡が、わずかに10cm前後しか残っていないからです。おそらく後に水田の開墾など何らかの理由で1m近く削られてしまったのでしょう。

西地点も同じような高さだったと思われるが、土器溜めに囲まれていないこと、また西側に流れる御笠川に向かって遺構が希薄になることなどから、東地点とは異なり、周囲は緩やかに傾斜していたようです。居住空間としては、微高地として独立していた東地点がより適していたのでしょう。

しかし、西地点にも少ないものの竪穴住居跡や井戸や土壇などが見つかっています。また両地点の間でできた土器溜めは、東側よりもむしろ西側から投げ込ま

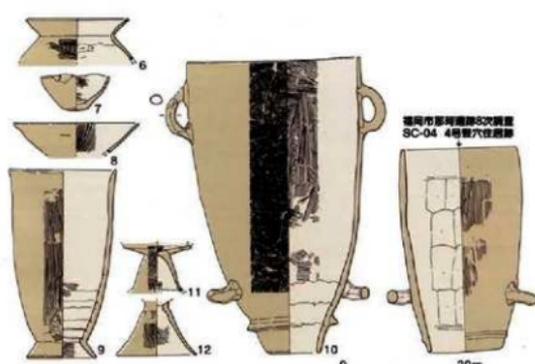
れた量が多く、西地点にもそれに見合う土地利用や生活内容を考えなければいけません。もちろん土器溜めが、ゴミ捨てのように日常生活の結果、自然にできあがったのではなく、折りやお蔵いとか特別な意図的行為で何回も投棄されたことも考えられ、両地点における遺構配置や土地利用の仕方など、さらに細かな検討が必要です。

ところで、検出した9軒のほとんどは、建て替えによる重なり合いがなく、また出土遺物にも、古墳時代前期に限られ、時間的な幅や差はあまり認められません。先に記したように削平され、すでに消失した竪穴住居跡もあったと想定されることから、集落を構成していた軒数や人口を正確につかむことは困難です。いま仮に10～20軒とし、5人家族とすると、50～100人前後の集落だったこととなります。発掘担当者のカンなので、何の根拠もありませんが、調査面積に対する遺構の密度、そして出土遺物の量などから受ける印象では、妥当な数字ではないかと思っています。



72 3号竪穴住居跡 (1/80)

■調5-58



73 出土遺物 (1/8)

■調5-59

竪穴住居跡一覧表 (古墳時代前期)

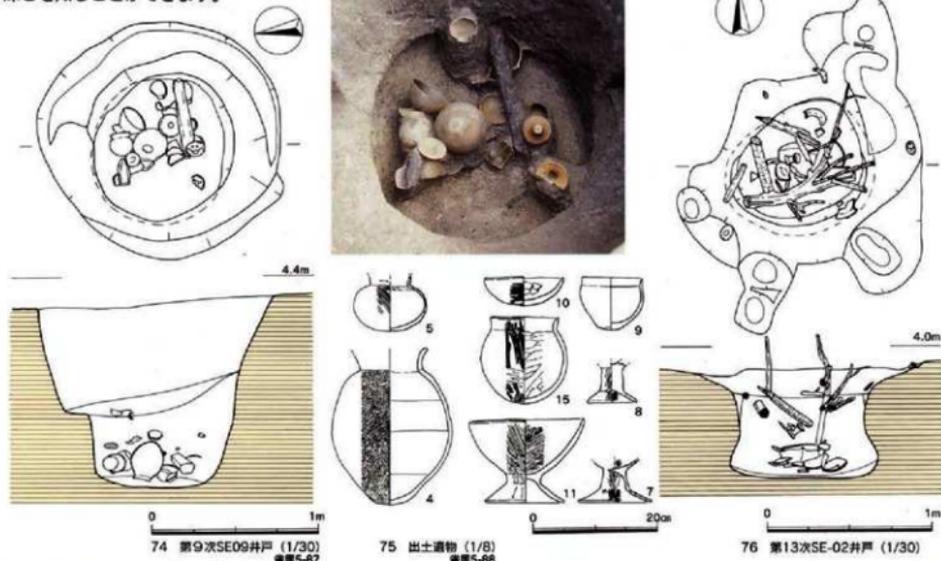
期号	形状	大きさ	面積 m ²	主柱数	備考
SC-01	楕円形	5.21×4.34	22.6	6	1区Ⅱ室
SC-02	楕円形	4.20×2.00+	—	2	南壁寄り土壇
SC-03	楕円形	4.20×3.84	16.13	1	北東隅は不明
SC-04	楕円形	3.30×3.28	10.82	—	小型
SC-05	楕円形	3.60×4.68	16.85	4	溝溝
SC-06	楕円形	3.86×4.17	16.10	—	扉面に灰、灰化物
SC-07	楕円形	4.02×4.34	17.45	—	—
SC-08	楕円形	4.22×4.50+	—	—	SC-07と重複
SC-09	楕円形	1.96×2.40	4.70	—	SC-07-08に切られる
SC-10	楕円形	3.84×4.64	17.82	—	建て替えか
SC-11	楕円形	3.24×3.14	10.17	—	小型
SC-12	楕円形	5.34×4.80	25.63	—	中央に柱土と灰
SC-13	楕円形	5.64×4.98	28.09	—	台形状
SC-01	楕円形	6.80×5.68	38.62	4	10区 SC-02に切られる
SC-02	楕円形	4.96×4.68	23.21	4	—
SC-01	楕円形	6.48×7	—	4	12区

※楕円というのは、楕が直ではなく、丸みがあるという意味です。

井戸

両地点で13基の素掘りの井戸が見つかりました。直径1.5～2m前後の円形で、深さは2m程です。低湿地なので、水は周囲にいくらでもありそうですが、衛生的な飲料水を確保するには、井戸は絶対欠かせないものでした。

水や井戸は、古くから人の生命や生産活動、そして集落の存続にも強く関わることなので、大事にし、畏れる意識が芽生え、信仰の対象になりました。13基のうちには、井戸としての役目を終え、埋没する途中に近くのゴミが投げ捨てられたようなものもありますが、完成品の土器をいくつも丁寧に投げ込んだものもあり、井戸に対するムラ人たちの畏敬の深さを知ることができます。



74 第9次SE09井戸 (1/30)
縮尺5-07

75 出土遺物 (1/8)
縮尺5-08

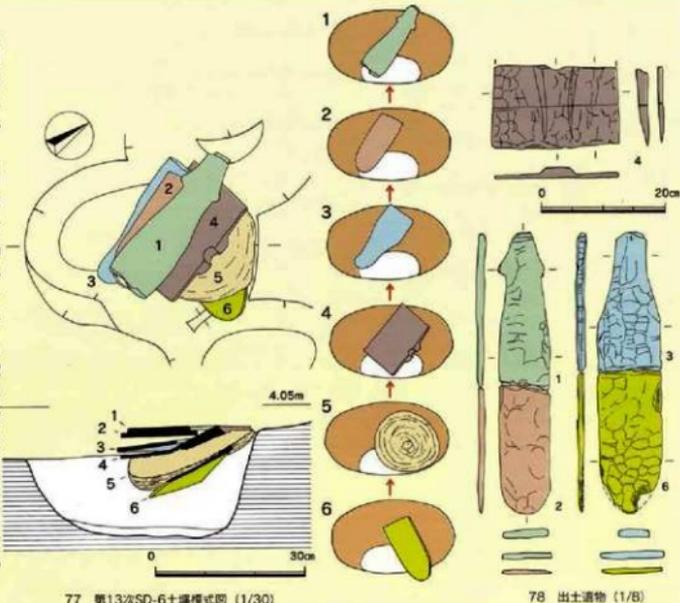
76 第13次SE-02井戸 (1/30)

土壌

両地点で43基見つかりました。土壌を掘った最初の目的や使用方法が分かる例は、ぎわめて希なことです。最後は遺物の捨て場として埋まっていることが多いからです。

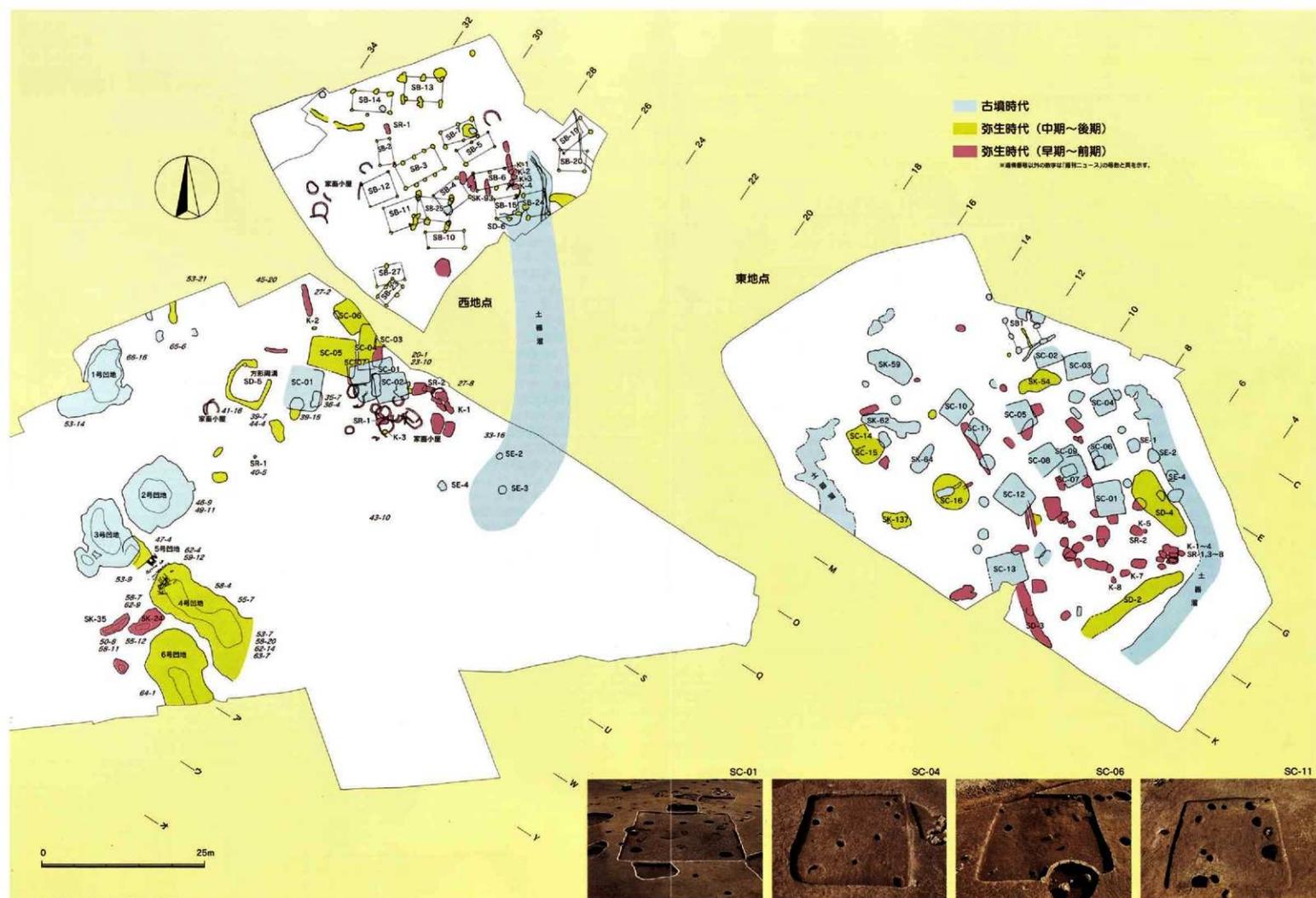
この土壌には、6枚の板が折り重なっていました。図を作成しながら上から順に取り上げると、その間には小枝を円形に丸めた鳥の巣状のクッションを挟んでいます。ただのゴミ捨て穴ではなさそうです。なんと6枚の板は、それぞれ図のように接合しました。古墳時代の平鍬とナスビ形狭鍬と呼ばれる農耕具です。よく見ると未製品で、しかもわざわざ横方向に刻み目を入れて二つに折っています。

第12次調査でも、柄を切断した広鍬2枚を穴に重ねた例がありました。作りかけの大事な農具を折り、穴に封じ込めるほど、願いや折りが強かったのでしょう。



77 第13次SD-6土壌様式図 (1/30)

78 出土遺物 (1/8)



79 弥生、古墳時代の遺構図 (1/500)
 遺構5-48-58

80 古墳時代の甕穴住居跡 (東地点)

弥生時代後期～中期

環溝集落である第4、5次調査地に比べると、弥生時代後期の遺構や遺物は極端に少ないのですが、逆に弥生時代中期の遺構、遺物が多いのが特徴です。

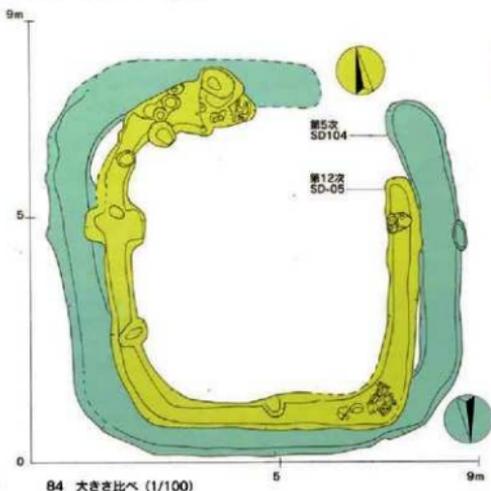
竪穴住居跡

東地点で弥生時代中期の円形と方形の竪穴住居4軒を発掘しました。西地点では1軒も検出できませんでしたが、西地点の遺物出土量が極端に多いことから、集落の中心はむしろ西地点にあったとも考えられます。無数に残る小さな穴は、すでに削られてしまった竪穴住居の柱穴と考えるとどうでしょうか。あるいは地面を掘り下げる竪穴住居は、低湿地の雀居遺跡には向かないので、掘立柱建物の柱穴かも知れません。床が高い掘立柱建物は、洪水にも対応でき、湿かに安全で快適な条件を備えているからです。

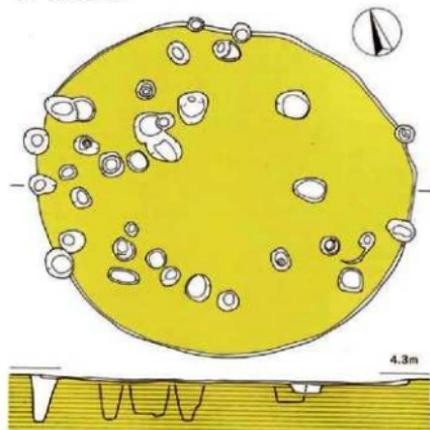
周溝遺構

幅約1m、深さ50cm前後、断面台形の溝を方形に巡らした遺構が、第5次と第12次で2基見つかりました。ほぼ同じ大きさで、一つのコーナーが入り口のように開いています。第5次の周溝からは、弥生時代後期の土器や三又鎌が出土しました。第12次の周溝からは、完形の土器が供えられたようにかたまっておりました。

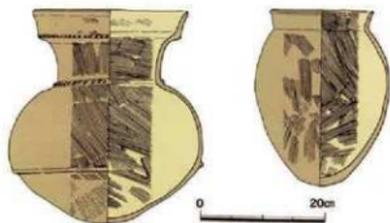
弥生時代から古墳時代にかけて、溝で方形に区画し、その中央部に遺体を埋葬する方形周溝墓が全国的に行われています。2基とも全体が剛平され、埋葬の痕跡がなく、祭祀の場の可能性もあります。もし墓だとすると、単独の集落と考えた2地点に各1墓しかなく、埋葬された人物の社会的役割やムラでの地位などを想像することができるでしょう。



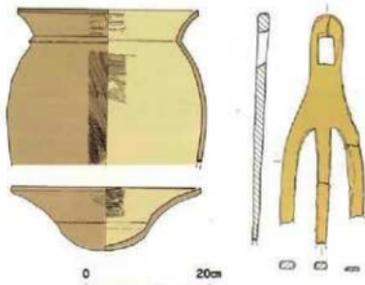
81 SC-16住居跡



82 SC-16住居跡実測図 (1/80)
観測5-145



83 第12次周溝遺構の遺物 (1/8)



85 第5次周溝遺構の遺物 (1/8)
観測3-62

掘立柱建物跡

掘立柱建物の柱は、電柱のように地面に掘った穴に直接差し込んで建ち上げるので、発掘では並んだ柱穴の数や方向によって、建物の規模や棟数、そして配置が分かります。しかしそれ以外の穴も同時に出てくるので、掘立柱建物だけの柱穴を選び出すことは、とても難しいことです。

雀居遺跡では、幸運なことに柱の沈下を防いだ礎板や柱根自体が残っている柱穴があり、割合簡単に掘立柱建物を識別することができました。ただ、第4、5次調査地の大型掘立柱建物跡とは異なり、規模も小さく、柱間隔も不規則です。しかもすべての柱穴に礎板や柱根が揃っていないので、礎板や柱根が残る柱穴を起点にして、従来のように物差しで間隔を測定しながら1棟分の柱穴を探しました。認定した18棟には、もしかしたら関係のない穴を誤って結んでしまっているかも知れません。今回は可能性があるものはすべて数え上げています。

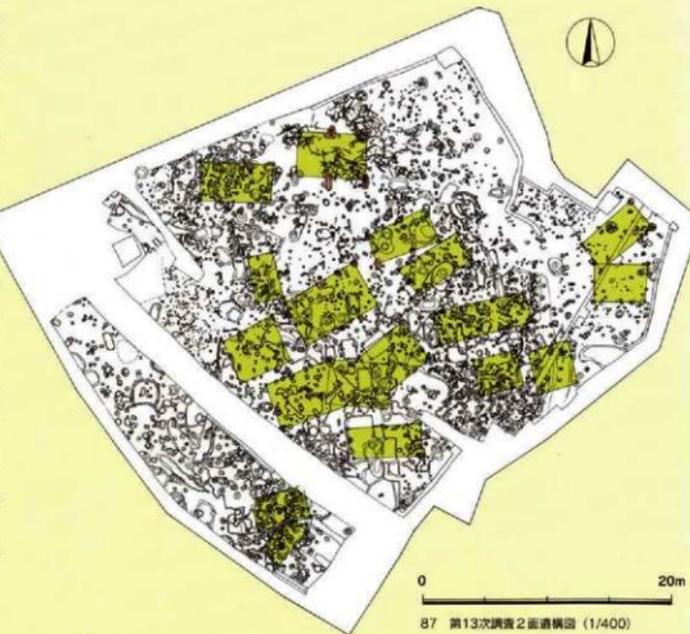
数棟の柱穴から弥生時代中期の土器片が出土したことから、おおよその時期を押さえることができますが、掘立柱建物跡の配置を見ると、いくつかの方向があることから、建て替えが行われており、ある程度長い期間にわたって存続していたと考えられます。

北側の1棟は、柱穴が通常の円形ではなく、楕円形で段掘りになっています。柱根を斜めに差し込んで徐々に起こしたのでしょうか。このような建ち上げの違いが、時期差を示すのか、あるいは建物の構造や用途によるのかも問題です。

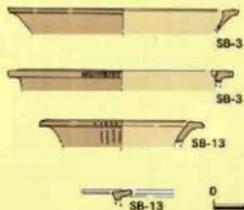
また、これらの掘立柱建物が、竪穴住居の代役として建てていたのかなど、まだまだ多くの課題が残っています。



0 20m
86 掘立柱建物跡配置図 (1/400)



0 20m
87 第13次調査2面透視図 (1/400)



88 柱穴出土の遺物 (1/8)

凹地

微高地の東地点には見られませんが、西地点の中央から南西寄りにかけて、数か所に自然作用によってできた円形や楕円形の窪地があります。その底は基盤層の青灰色粘質土層を浸食し、水脈のある砂礫層まで達しているため、激しく湧水します。これらを凹地と呼びました。弥生時代早期～前期以降、各時代ごとにでき、すぐに埋没し、また新しい凹地ができています。

弥生時代前期後半から中期前半の第4号凹地は、第12次調査区のほぼ中央にあります。北西から南東方向の楕円形で、一端がくびれてさらに南端で別の凹地と繋がりがり、南東方向に開いています。

その北西端部には、丸太杭を幅約60cmの2列に打ち込んで補強した小遺状の遺構があり、その手すり状の板材が凹地に倒れ込んでいました。この下から三又鎌、竪杵、弓などの木製品が集中して出土し、目のような不思議な文様をつけた土器も近くで割れた状態で出土しました。



89 作業の様子



90 木製品の出土状況



91 第4号凹地の発掘作業



東、西地点の間にある古墳時代前期の土器溜めは、浅い谷状の斜面に土器を投げ込んでできたものです。それ以前の遺物は含まれていないことから、いつこの浅い谷ができ、二つの微高地に分かれたのかが問題です。浅い谷の地形が、集落を分離させ、二つの集落に分かれ独立するきっかけにもなるからです。

竪穴住居跡の他にどのような遺構が揃うと、一つの集落として認められるのか、また二つの微高地にそのような集落遺構が見つかったとして、それぞれが本当に独立していたと言えるのか、それは何で証明するのか。たとえ地形的にも視覚的にも分かれていても、ムラ人が、一つのムラと思っている場合もあり、こんなムラ人の意識や考えを発掘でどう確認するのか。どう掘り出すのか、発掘作業員の皆さんと共通の疑問を持ちながら、毎日の発掘作業を進めました。

その結果、東地点で土壇、溝、墓、西地点で竪穴住居跡、土壇、溝、墓を確認しました。また家畜小屋と思われる遺構も新たに見つかり、小さな話題になりました。

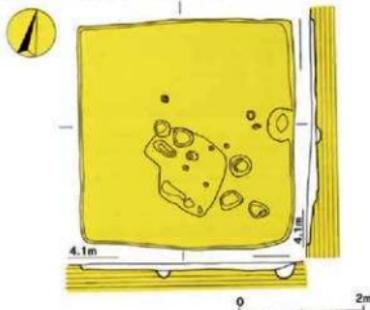
これら考古学上の新しい知見は、発掘作業員の皆さんの熱心な作業の結果発見されたものです。発掘に対する関心や注意力、歴史の真実や人間、いや自分自身を知りたいという強い意欲が、新しい事実を掘り出したのです。

竪穴住居跡

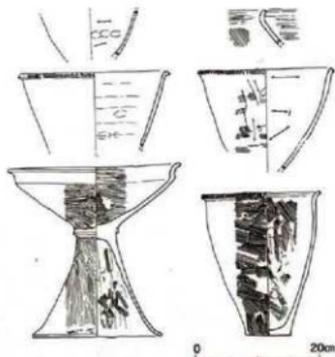
西地点の第10次調査で弥生時代前期の竪穴住居跡を1軒確認しました。

2.94m×3.20mの方形で、深さはわずかに10cm程しか残っていません。激しく削平を受けて、他の竪穴住居は消えてしまったのでしょうか。出土した土器から弥生時代前期の時期が確定できました。

雀居遺跡では弥生時代前期の住居跡としては、唯一の例として貴重です。しかも家畜小屋と推定した円形溝の一部を壊して作られおり、その先後関係が明瞭で、円形溝の時期を推定できるようになりました。



94 第10次SC-07住居跡実測図 (1/80)



96 SK-93土壇の遺物 (1/8)

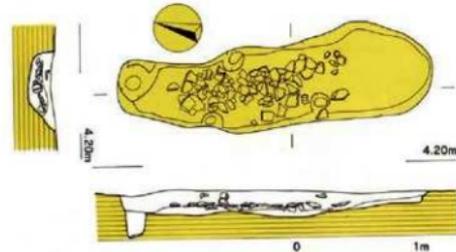


93 竪穴住居跡と家畜小屋

土壇

竪穴住居跡がわずか1軒なのに比べ、土壇はなぜか極端に多く、両地点で102基を数えます。多くの土壇の最後は、ゴミ穴として埋没しています。第10次では、土器片に混じって乳児骨が埋葬されており、雀居ムラの事件かと一瞬緊張しました。

ゴミの量は、当時の生産力や旺盛な生活力を示しています。土壇が東、西両地点の一方に偏らず、広く分布していることから、両地点ともに同じような生活が展開していたと推測する根拠にもなるでしょうか。



95 第13次SK-93土壇実測図 (1/40)

墓

弥生時代前期の墓を、東地点で1か所、西地点で2か所確認しました。地面を長方形に掘り窪めて遺体を納めた土壇墓、土壇に板材を組み立てて棺にした木棺墓、そして大きめの土器を棺に使った壘棺墓で構成され、この他に乳児を小さな穴や土壇に埋葬したのが2例ありました。

弥生時代の北部九州では、共同墓地が営まれます。弥生時代前期後半頃から墓槽と呼んでいる埋葬専用の大型土器が作られるようになり、雀居遺跡の南東3kmにある金隈遺跡のように、500墓を越すような大きな墓地も出現します。

ただ共同墓地は、一つの集落ごとに作られるのか、複数の集落でできたのか、ムラ人の誰もがそこに埋葬されたのかなど、肝心なことがまだ明らかではありません。しかし、墓は、人骨や埋葬風習など多くの情報を伝えてくれます。

西地点で合計17体の人骨が残っていました。人骨の調査をお願いした九州大学中橋孝博教授の報告によると、縄文人とは異なる、いわゆる「渡来系弥生人」の特徴を持っていないながら、女性3体には、縄文時代の伝統的な歯を抜く風習が依然として行われていたことが分かり、縄文時代にかわって新しくスタートした弥生時代の状況が、きわめて複雑であったことをあらためて認識することになりました。

雀居ムラは、米作りなど新しい技術や道具、そして新しい風習や信仰を持った弥生人たちが、御笠川の低湿地という過酷な自然環境に立ち向かい、鎌を振り下ろしたその瞬間から始まりました。ムラ人たちが縄文時代以来の伝統や風習を完全に否定し、拒絶することなく、もしかしたら元からいた周辺の縄文人と一緒に力を合わせてムラを作ったとも想像されることに、訳もなく安心してしまふのは、発掘担当者の個人的な感傷でしょうか。

土壇墓・木棺墓一覧表

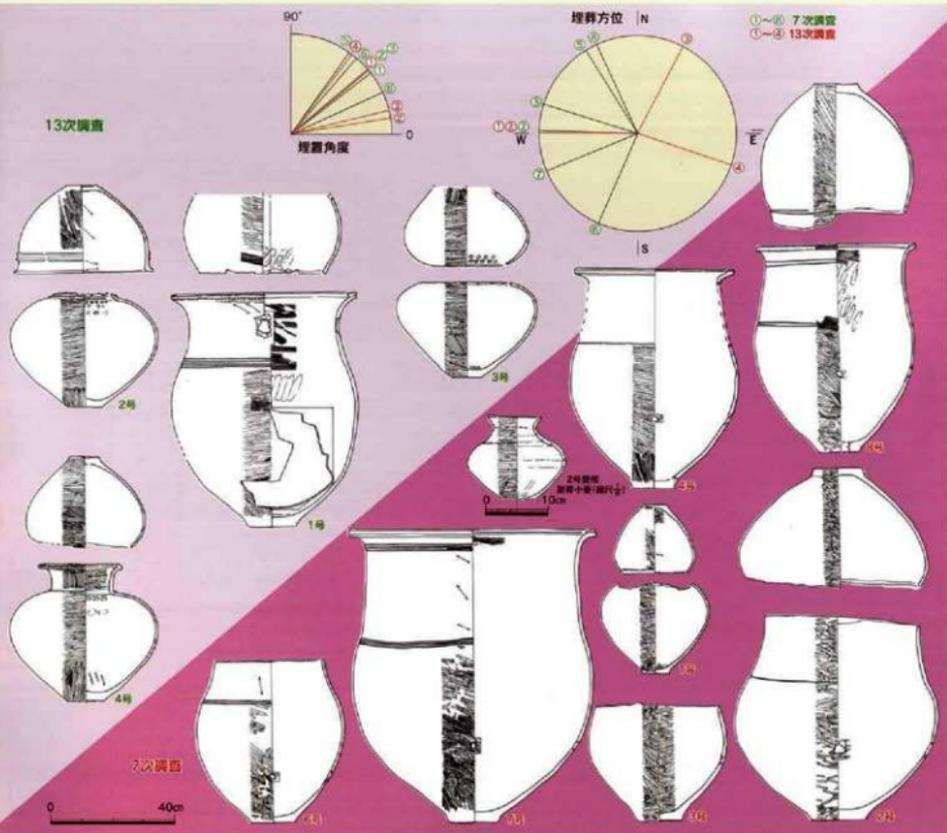
次	番号	大きさcm	性別	年齢	埋葬姿勢	抜歯	副葬品
7	1号	110×120	女?	成年	不明	有?	
	2号	132×164	女	成年	仰臥屈肢	有	
	3号	80×130	男?	成年	不明	?	
	4号	径30 円形	?	成年	不明	?	
	5号	57×137	?	熟年	仰臥屈肢	?	小壘
	6号	100×150	女	成年	仰臥	?	
	7号	70×160	男?	成年	仰臥屈肢	?	
	8号	70×150	男	成年	仰臥屈肢	?	
	9号	不明	男	熟年	不明	?	
10	1号	130×195	?	?	側臥屈肢		
	2号	60×120	?	?	側臥伸肢		木棺墓
12	1号	31×35	?	新生児	屈肢		
13	1号	68×160	?	?	仰臥屈肢		ガラス玉



98. 壘棺墓の人骨 (第13次)



99. 土壇墓の人骨 (第7次)



100 東、西地点の甕棺と副葬小器 (1/16・1/8)
 圖5-12-14-15

甕棺一覽表

次	番号	単棺	棺		合わせ口の方法			大きさ	埋葬方位	埋葬角	時期	備考
			上棺	下棺	接口	覆口	挿入					
7	1号	○	小型壺	小型壺	○		小型	N-32°-W	38°	前期後半	墓壇は浅い。両棺とも口縁部打ち欠き	
	2号	○	中型壺	中型壺	○		中型	N-88°-E	40°	前期後半	両棺とも口縁部打ち欠き。人骨 棺外に小器副葬	
	3号	○	壺?	小型壺	○		小型	N-85°-W	40°	前期後半	2号棺と重棺、両棺とも口縁部打ち欠き	
	4号	○	専用カメ				中型	N-84°-W	45°	前期後半	2号を切る器高71.5cm 胴部下半に穿孔	
	5号	○		小型			小型	N-73°-W	55°	中期初頭	群から離れている。	
	6号	○		中型壺			中型	N-24°-E	50°	前期後半	口縁部打ち欠き。推定器高は52cm 覆棺か?	
	7号	○		専用カメ			大型	N-67°-E	40°	前期後半	大きな墓壇 人骨 器高93.3cm	
	8号	○	専用カメ	中型壺		○	中型	N-25°-W	25°	前期後半	楕円形墓壇 下推の器高は66.5cm 胴部下半穿孔	
10	1号	○	?	小型壺			小型	N-33°-W	?	前期末~	土壇否?	
	2号	○	小型壺	小型壺	○		小型	N-85°-W	5°	中期前半	墓壇不明	
	3号	○	小型壺	小型壺		○	小型	N-85°-W	26°	後期		
13	1号	○	中型壺	専用カメ		○	中型	N-89°-W	40°	前期後半	人骨、棺外に土器片	
	2号	○	小型鉢	小型壺		○	小型	N-89°-W	10°	中期前半		
	3号	○	小型壺	小型壺		○	小型	N-27°-E	14°	中期前半		
	4号	○	小型壺	小型壺		○	小型	N-70°-W	53°	中期前半		

家畜小屋

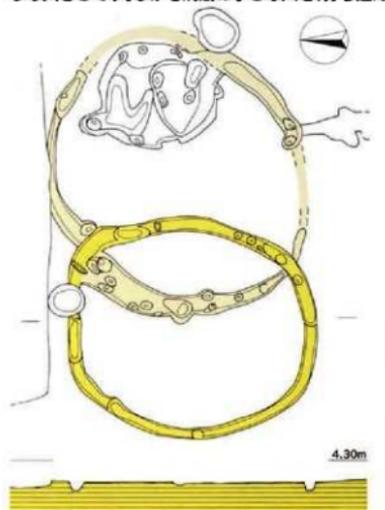
西地点第10次調査の最終段階で、見慣れない遺構が出てきました。直径1.6~2.1mの円形の溝が、ちょうどオリンピックの五輪マークのように重なって次々に発見されたのです。その溝は、幅約18cm、深さ20cm前後ですが、溝底にはさらに直径10cmほどの小さな穴が隙間もなく並んでいます。福岡市内、いや全国でも、初めて目にする遺構です。

当初は用途がさっぱり分かりませんが、アジアを中心に世界での布や機織りを精力的に研究されている福岡県工業技術センターの鳥丸貞恵先生より、中国貴州省で撮影された写真をいただき、それをヒントに家畜小屋ではないかと推測しました。その写真には、丸太杭で円形に囲まれた中にブタ1頭が飼育されており、それは省居遺跡の円形溝と同じような大きさです。しかも溝底の小さな穴を、打ち込んだ丸太杭の痕跡とすると、構造も一致します。

中国大陸や朝鮮半島の影響で始まった弥生時代には、米作りと一緒に当然伝わっていいはずの牛や馬、そしてブタなどの家畜をなぜか飼育していないというのが、長い間の定説でした。家畜の骨や小屋などの証拠が発掘されていなかったからです。

しかし弥生遺跡から出土する動物の骨の研究によって、家畜化を示すブタの骨が続々と見つかり、弥生時代にはブタを飼育していたと修正されました。ところが最近のDNA鑑定によると、それはブタではなくイノシシという結果が発表され、混沌としてきました。

結論を導くには、円形溝の土から家畜特有の糞虫を探したり、土中に残る脂肪酸で動物の種類を区別したりとか、さまざまな研究が必要が必要です。注意して発掘すると円形溝の中に家畜の足跡を発見できるかも知れません。最近、板付遺跡や南区登枝遺跡でも、家畜小屋と思われる例が見つかりはじまりました。



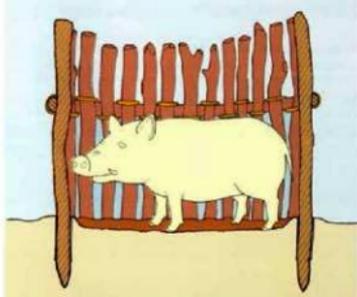
101 円形溝実測図 (第10次 1/40)



104 円形溝 (12次)



105 円形溝 (13次)



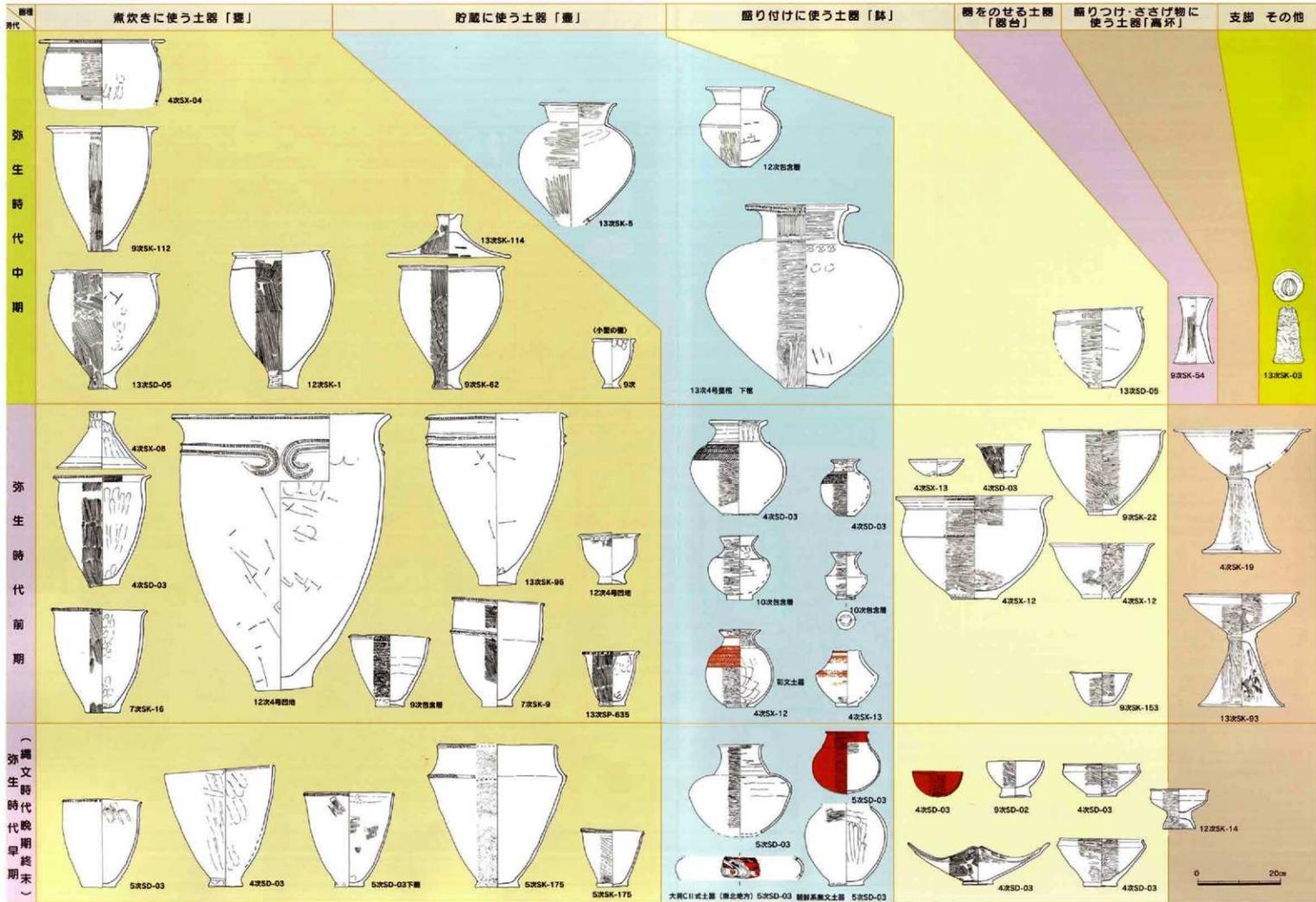
102 ブタ小屋想像図



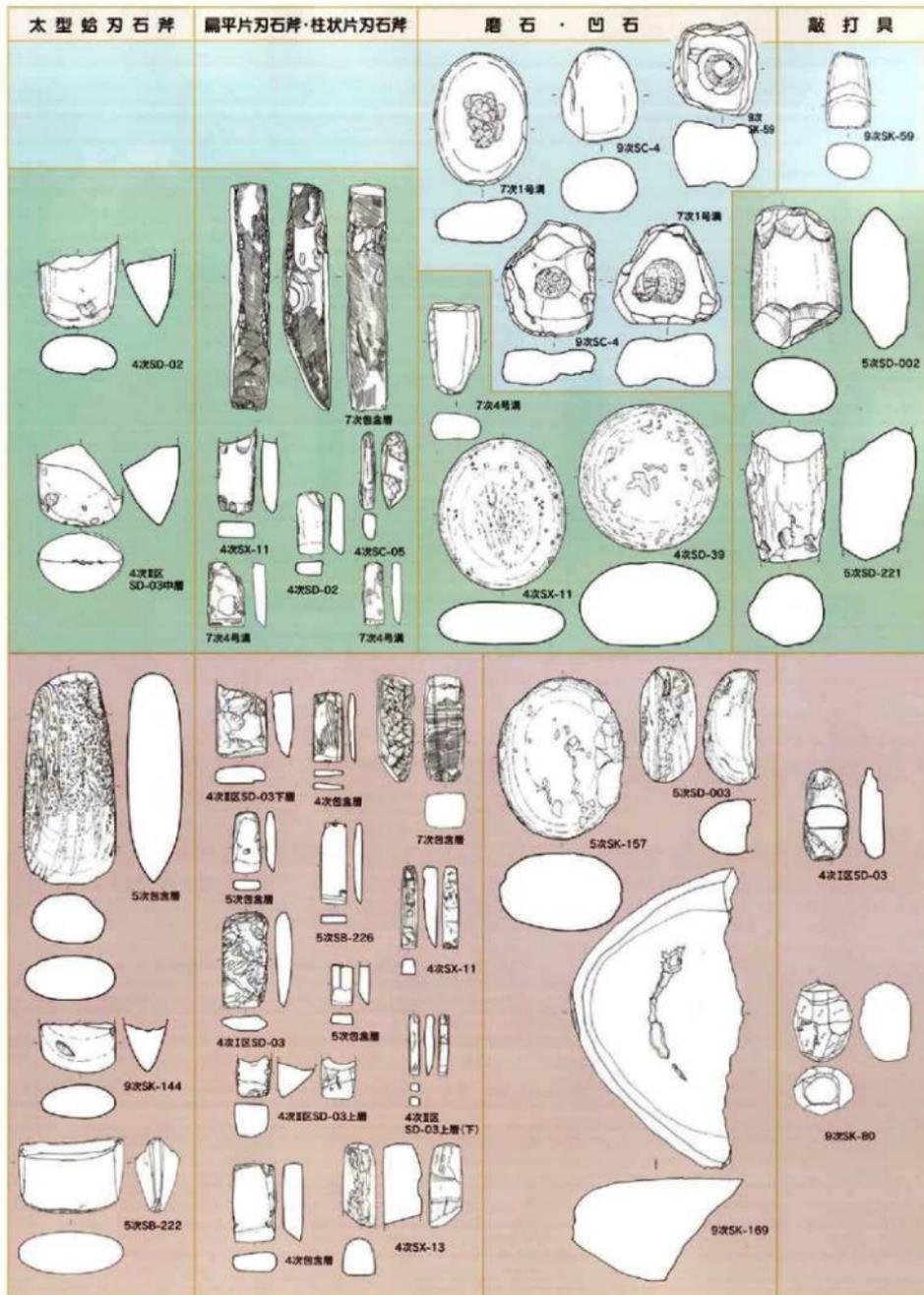
103 中国貴州省のブタ小屋 (鳥丸貞恵先生撮影)

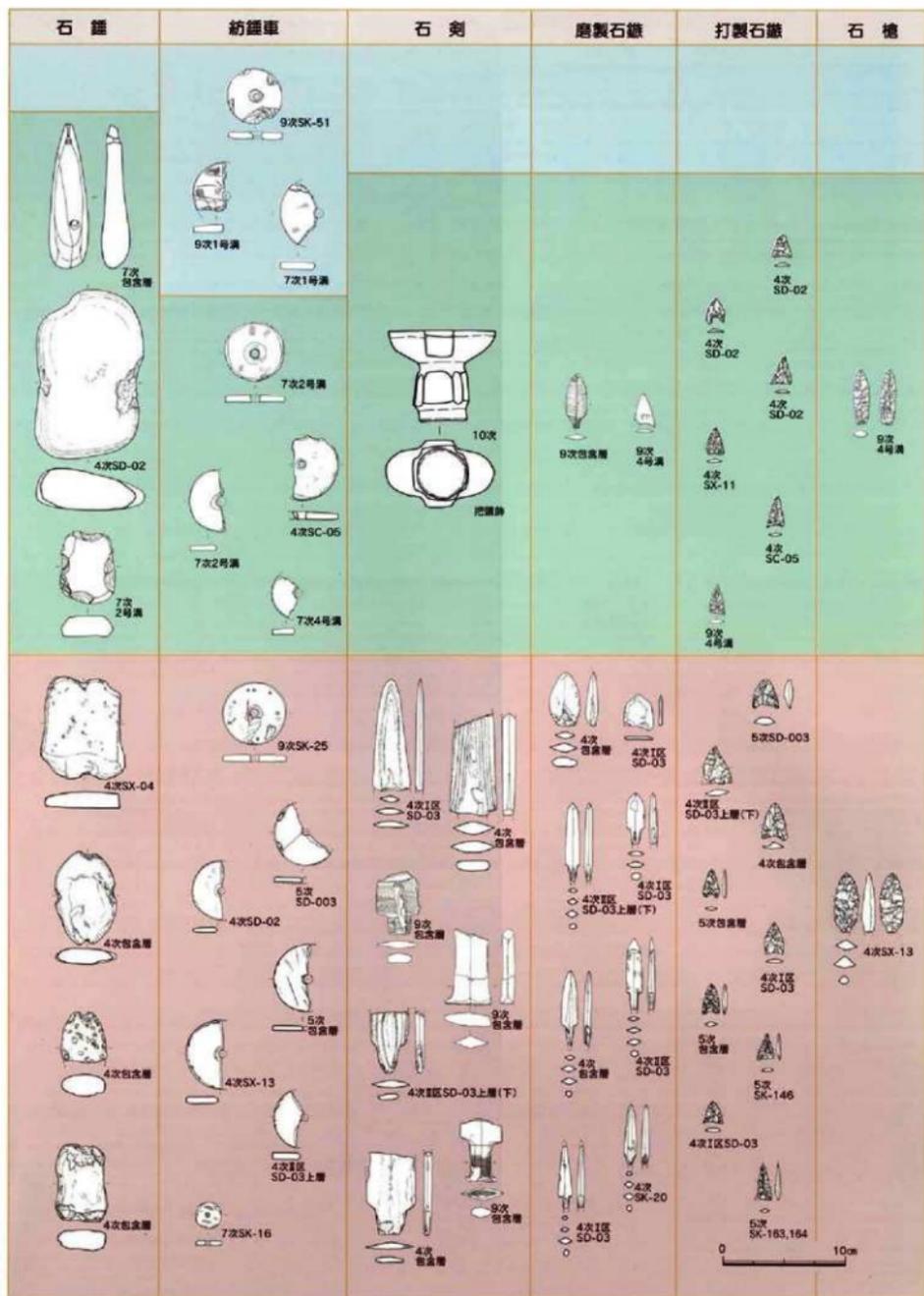


106 円形溝 (10次)



種類 時代	石包丁(穂摘具)	石鎌	磨製石斧
古墳時代			
弥生時代 (後期～中期)	<p>7次2号溝</p> <p>5次SD-221</p> <p>4次SD-02</p> <p>5次SD-221</p> <p>7次2号溝</p>	<p>5次SD-002</p> <p>9次SK-54</p>	
弥生時代 (前期～早期)	<p>4次性直鎌</p> <p>4次SD-02</p> <p>4次SX-04</p> <p>4次SX-04</p> <p>4次包次鎌</p> <p>4次直区SD-03上層</p> <p>4次SX-13</p> <p>5次性直鎌</p> <p>4次直区SD-03</p>	<p>4次直区SD-03上層</p> <p>5次SD-221</p> <p>5次SD-105</p> <p>4次SX-04</p>	<p>4次直区SD-03</p> <p>4次SX-04</p> <p>4次SD-03</p> <p>4次直区SD-03上層(下)</p>





発掘調査データ

次 数	1 次 (14区)	2 次	3 次	4 次	5 次
調査番号	9114	9131	9230	9241	9317
遺跡番号	SAS-1	SAS-2	SAS-3	SAS-4	SAS-5
調査地	空海西側	国海線ターミナル	国海線ターミナル	白糠跡地跡	白糠跡地跡
分布地区番号	022上臼井 023番尾	022上臼井 023番尾	022上臼井 023番尾	023番尾	023番尾
対象面積	47,000㎡	1,739㎡	5,000㎡	2,963㎡	3,500㎡
調査面積	試験坑3箇分	1,700㎡×2箇	3,590㎡	2,560㎡	3,340㎡
調査期間	910615~910803	911018~911228	920603~930322	921019~930331	930615~940228
事前調査番号		2-1-432	2-1-432	3-1-417	3-1-417
担当姓名	栗 松	下 村	坂 村	下 村 宮 井	坂村 宮井 加藤

各時代の遺構

時代	名 遺 構 遺 構 種類	1 期		2 期		3 期		4 期		5 期	
		1 期	2 期	1 期	2 期	1 期	2 期	1 期	2 期	1 期	2 期
古 石	井 戸		3基		1基		1基				
	溝		5条	1条	1条	2条	1条	1条	1条	1条	
	土 溝		66基			27基	6+				
古 土	水 田				5枚		8枚				残片
	屋状遺構		1基								
	住居跡									0軒	
古 土	井 戸										
	溝						1条		1条		
	土 溝						1基		1基		
古 土	墓										
	竪立柱建物						2棟				
	住居跡						1軒		1軒		
古 土	溝						5条		環溝+方形溝溝		
	土 溝										
	竪立柱建物						14棟		6棟		
古 土	住居跡										
	溝						3条		3条		
	土溝墓								1基		
古 土	土 溝										
	土 溝						17基		15基		

遺物の種類と数量

	平成10年1月6日	平成10年1月6日	平成7年8月8日	平成12年7月7日
センター取組				
コンテナ箱数	39箱	19箱	1,449箱	267箱
遺物数計数	522点	370点	7,174点	2,779点
土 器		344点	4,706点	1,949点
石 器		17点	1,727点	667点
木 器		8点	683点	133点
金属器		—	数6点 銅5点	鉄4点 銅4点
ガラス器		—	2点	3点
その他		骨1点		種子11点
調査数計数	81枚	73枚	677枚	442枚
遺物実測図	A2 29枚	26枚	566枚	320枚
遺物実測図	A2 52枚	45枚	109枚	122枚
写真数計数	944コマ	529コマ	2,856コマ	1,801コマ
35mm ①/0	150コマ	13コマ	45コマ	28コマ
②/0-③/0	222コマ	310コマ	840コマ	615コマ
70-①/0	366コマ	206コマ	1,332コマ	826コマ
②/0-③/0	206コマ		636コマ	330コマ

発掘調査報告書

報告書名	編纂通時 1	編纂通時 4	編纂 2	編纂 3
報告書号数	第322集	第505集	第407集	第407集
発行年月日	1993(平5)3月31日	1996(平10)3月25日	1995(平7)3月31日	1995(平7)3月31日

発掘調査データ

区 域	6 次	7 次	8 次	9 次	10 次
調査番号	9319	9435	9453	9569	9909
遺跡番号	SAS-6	SAS-7	SAS-8	SAS-9	SAS-10
調査地	国際線ターミナル	ブランド用地	国際線ターミナル	ブランド用地	燃料タンク用地
分布地区番号	023南側	023南側	023南側	023南側	
対象面積	6,000㎡	3,500㎡	6,000㎡	8,000㎡	2,800㎡
調査面積	6,000㎡	3,500㎡	4,850㎡	4,450㎡	1,310㎡×4箇
調査期間	930615～940228	940801～941226	941107～950320	950508～960325	960513～970131
事業調査番号					
担当者名	松村	松村・臼井	松村・臼井	松村	力 武

各時代の遺構

時 代	区 域 名	2層		1段1室		1室		1段5室、5段1室		5段5室		1室		2室		3室	
		1室	2室	1室	2室	1室	2室	1室	2室	1室	2室	1室	2室	1室	2室	1室	2室
古 代	井戸																
	溝					8基	3基	1基									
	土壌	1基				17基											
古 墳 時 代	水田	27枚					14枚								18枚		
	居住遺構																
	住居跡							1軒	12軒					2軒			
古 生 中 世	井戸			5基													
	溝			1基										2基+			4基
	土壌			2基										10基	1基		
中 世	墓																
	墓立柱建物													1棟			
	住居跡														1+3?		4軒
近 世	溝													2条			
	壁跡等															1基	2基
	土壌													1基	7基		
近 世 末 半	墓立柱建物																
	住居跡																1軒
	溝					3条								1条	3条		
近 世 末 半	壁跡等					8基											
	土壌					9基											2基
	土壌					11基								16基			22基

遺物の種類と数量

	平成10年1月6日	平成12年7月7日	平成10年1月6日	平成12年7月7日	集収量
センター収蔵					
コンテナ総数	1箱	457箱	9箱	959箱	886箱
遺物量総数	9点	1,401点	157点	3,202点	1,598点
土 器	6点	1,124点	138点	2,391点	1,415点
石 器		206点	16点	700点	153点
木 器	2点	9点	1点	7点	10点
金属器		鉄3点 銅1点	鉄2点	鉄1点	10点
ガラス品					
その他					20点
陶器量総数	22枚	246枚	84枚	509枚	96枚
遺構関係	1枚	160枚	11枚	336枚	96枚
遺物実測図	21枚	86枚	73枚	173枚	未数計
写真量総数	172コマ	652コマ	385コマ	1,424コマ	2,344コマ
35mm	モカ	4コマ	12コマ	7コマ	24コマ
	妙-GI-機	104コマ	272コマ	211コマ	479コマ
70mm	レカ	58コマ	467コマ	132コマ	820コマ
	妙-GI-機		101コマ	35コマ	101コマ
4×6	レカ				
	妙-GI-機	6コマ			108コマ

発掘調査報告書

報告書名	遺跡番号 4	遺跡番号 5	遺跡番号 4	遺跡番号 5	遺跡番号 7 未発
報告書枚数	第565集	第635集	第565集	第635集	
発行年月日	1998(平10)3月25日	1998(平12)3月24日	1998(平10)3月26日	1998(平12)3月24日	2003年度発行予定

発掘調査データ

項目	11 次	12 次	13 次	合計
調査番号	9319	9715	9819	
遺跡番号	SAS-11	SAS-12	SAS-13	
調査地	国際線ターミナル	燃料タンク用地	燃料タンク用地	
分布地区番号	023編区	023編区	023編区	
対象面積	2,600㎡	5,800㎡	1,700㎡	98,622㎡
調査面積	1,380㎡	5,800㎡×3画	1,700㎡×3画	60,810㎡
調査期間	961101~961130	970508~980325	980415~981225	
事前調査番号				
担当者名	力 武	力 武	力 武	

各時代の遺構

時代	区分・遺構	遺構						遺構計
		1画	2画	3画	7画	2画	3画	
古	井戸							4基
	溝							12条
	土壌							117+基
	水田	8枚	25枚	2枚	9枚			116枚・状列
古	溜池遺構							1基
	住居跡							23軒
	井戸				1基	1基		14基
	溝				1条			6+条
古	土壌		1基	3基	1基	11基	5基	45基
	墓							0
	竪立柱建物							3棟
	住居跡				2軒	(1)軒		9+37+(1)軒
古	溝			方形周溝1	2条	3条		13条+横溝1+周溝2
	壁付墓							3基
	土壌		4基	10基	17基	19基		60基
	竪立柱建物					18棟		38棟
古	住居跡							1軒
	溝							13条
	壁付墓					4基		13基
	土壌					1基		12基
古	土壌		1基	16基	5基	21基		124基

遺物の種類と数量

	平成10年1月6日	未収区	未収区	遺留・記録数
センター初探				6,403箱
コンテナ箱数	1箱	1,058箱	620箱	
遺物数録数		2,100点	2,224点	21,539点
土 器			2,056点	14,131点
石 器			75点	3,500点
木 器		150点	81点	1,084点
金属器			42点	80点
ガラス品			4点	5点
その他			51点	63点
図面登録数	15+枚	155+枚	286+枚	2,886+枚
遺構関係	15枚	155枚	161枚	1,890枚
遺物実測図	未登録	未登録	125枚	806枚
写真登録数	84コマ	3,044コマ	1,253コマ	15,687コマ
35mm	7コマ	—	—	283コマ
	8コマ	1,515コマ	632コマ	6,799コマ
70mm	15コマ	799コマ	208コマ	6,068コマ
	1コマ	544コマ	100コマ	2,408コマ
4×5	—	12コマ	29コマ	60コマ
	9コマ	164コマ	84コマ	365コマ

発掘調査報告書

報告書名	調査遺跡 4	調査遺跡 7 未定	調査遺跡 7 未定	調査遺跡 8
報告書号数	第65集			
発行年月日	1998(平10)3月25日	2003年度発行予定	2003年度発行予定	

発掘資料の整理作業と保存・活用

雀居遺跡の発掘調査は、平成10年12月で終わりましたが、出土した遺物と遺構を実測した図面や撮影したフィルムなどの記録類の整理が次に控えています。さらに発掘の記録や遺物、遺構の分析、検討結果など調査成果をまとめ、発掘調査報告書として発行します。この報告書は、全国の主な研究施設や図書館などに送付するので、研究者だけでなく誰もが利用することができます。しかし、これで発掘の役目が終わった訳ではありません。先の遺物や記録類を、取蔵保管し、脆弱な遺物は保存科学処置

を施し、学術研究や博物館、学校そして市民の方々がいづつでも利用、活用できるようにしておかなければいけません。

福岡市では、これら一連の作業を発掘担当者が責任をもって遂行し、現代の開発によってやむなく姿を消した遺跡を長く後世に伝え、その発掘資料を盛んに活用できるようにしています。この目的は、一連の作業に携わっている数多くの人たちの努力と熱意があつてこそ実現します。ここでは発掘後の主な作業を紹介しましょう。



出土物の洗浄とナンバリング

水洗いできれいに土を落とした遺物に、道跡名や出土地点、遺構や土層名、あるいは遺物の登録番号などを細かい筆で記入します。全部書くと、小さな破片ではあふれてしまうので、一定のルールに従って定めた略号を記入します。

雀居遺跡はSAS、板付遺跡はITZのように福岡市内の遺跡のすべてを、その読み方からローマ字3字に略しています。また発掘調査をするその年度での着手順位を4桁の数字で表した調査番号が与えられます。雀居遺跡第12次調査は、9715です。また遺物には、5桁数字の遺物番号を付けます。最後に調査番号と遺物番号を合わせて登録しますが、この登録番号を記入していることによって、どんな小さな破片でも、身元不明になることはありません。この方法は、遺物だけでなく、実測図や写真などの記録資料でも同じです。



土器の接合

ほとんどの土器は割れて小さな破片になっているので、元の形を知るために破片を接合します。ジグソーパズルのように絵があるといのですが、土器には絵がないことが多いので、割れ口や表面の細かな傷を頼りに、接合作業を続けます。遠く離れて出土した破片が接合することもあり、記憶力と集中力が求められます。ずいぶん目や神経が疲れますが、思わぬ形に復元できた時の感激は、とても大きいものです。



土器の実測

接合した土器は、その形状や厚みを実測し、その粘土や作り方、焼き具合、そして使用した時の痕跡などを細かく観察し、記録します。この実測図によって、他の土器との比較が可能になり、製作技術の変化や土器の広がりなどが分かります。雀居遺跡では、地元で作られたとは思えない土器が混じっています。遠くから土器だけが依ってきたのか、よその人が持ち込んだのか、あるいはよその人が雀居ムラで作ったのか。もしかしたら当時の結婚相手の出身地や行動範囲を明らかにできるかも知れません。土器には、多くの情報が隠め込まれ、私たちが語りかけるとたくさんのお話を教えてくれます。「土器は言葉」と言われる所以です。



土器の復元

ジグソーパズルは元の絵が決まっていますが、発掘で掘り出した土器は、すべての破片が揃っているとは限りません。破片が足りない時は、その隙間に石膏を加え、着色し、元の姿に完全になるよう復元します。土器を作った人と同じような高い技術と情熱、そして美的センスが必要な作業です。



木製品の实測と保存科学

長く土中であつた木製品は、掘り上げると、水分が抜けて変形するので、また水槽に入れなければいけません。実測も撮影も、短時間勝負。とても展示することはできません。

そこで福岡市埋蔵文化財センターでは、ポリエチレングリコールという薬液の中に漬けて木製品の水と入れ替えるPEG処理や真空凍結乾燥法などの保存科学処理を行っています。雀居遺跡の木製品のほとんどは、まもなくその処理が完了するので、手にとって観察したり、博物館などで展示することが可能になります。



作図とトレース

発掘で検出した遺構は、その形状や遺物の出土状況などを20分の1に縮尺して方眼紙に写し取ります。発掘面積に比例して遺構図の枚数は増えますが、さらに縮尺して貼り合わせ、全体図を作ります。最後に薄い紙にトレースして完成です。この図によって、遺構の配置や変化が分かり、遺跡の全体像が見えてきます。調査報告書を発行するにも、遺構図や遺物図を割り付けに従ってトレースし、印刷にまわします。



発掘資料の収蔵

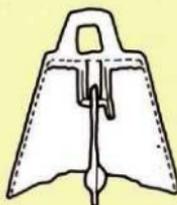
調査報告書が発行されると、資料のすべてが埋蔵文化財センターに収蔵されます。土器の破片も写真の1コマも登録され、決まった棚に収蔵されているので、図書館の本のように、誰もが検索し、すぐに探出すことができます。平成13年の現時点で、収蔵されているコンテナ数は、なんと81,344箱。登録されている遺物は、476,760点。全国一のシステムと収蔵庫です。つまり福岡市埋蔵文化財センターでは、研究者に限らず誰もが目的に応じて、再発掘ができると言うわけです。雀屋遺跡の発掘資料のすべても、このようにして収蔵され、次の出番を待っています。

保存科学処理

保存科学処理が必要なものは、木製品だけではなくありません。錆びた金属器、植物繊維の布や糸、薄い膜だけが残った漆器などまだまだたくさんあります。これらが出土すると、埋蔵文化財センターの出番です。

第13次調査では、土器溜めから中国製と思われる青銅製の馬鐔を発見しました。馬鐔は、家畜の首に垂らしたものです。中に棒(舌という)があり、歩くたびに揺れて風鈴のように涼やかな音がします。日本で発見される馬鐔は、その舌がすでに失われていることが多く、また今回も土が詰まっていたので、まったく期待しませんでした。

ところが埋蔵文化財センターでは、透過X線撮影で舌が残っていることが分かり、慎重に土を取り除いた結果、雀屋ムラの人々が聞いた音色が現事に蘇りました。銅鐔や楽器などの音響遺物を発見することは、自身体験いことで、当時の音色が蘇ることは、さらに珍しく、まさに保存科学の大きな成果と言うことができるでしょう。



111 馬鐔と透過X線写真

おわりに

第10～13次調査の3年の間、「雀屋遺跡週刊ニュース」を毎週発行しました。

福岡空港に完全にバックされた米作りのムラを掘り出すという絶好のチャンスに恵まれ、その感動を発掘に携わる多くの方々と共有し、楽しもうという素朴な目的でした。

発掘作業は、厳しい天候下の作業が続く、ともすれば単調になり、ケガや事故が起こりがちです。こんなつらい作業を吹き飛ばし、すずめの学校のようにみんなでワイワイガヤガヤ賑やかに発掘しようというわけです。その日その日の小さな出来事や発掘しながらの雑談をまとめただけでなく、学術的な報告書にはふさわしくありませんが、発掘作業員の皆さんと、どんな疑問、関心、期待を持って発掘したが、またその結果どんな成果が得られたかが分かるかと思えます。雀屋という地名と些細な内容からニュースの名前を決めました。

ところで最近の調査報告書は、発掘の結果報告だけでなく、発掘担当者の問題意識や試行錯誤の過程を記録した調査日誌を掲載する例が少なくなりました。発掘の方法が以前と変わったとは思いますが、予算や整理期間に制約のある現状では、仕方がないことです。

遺跡の発掘調査報告書は、人の死亡診断書と似ています。発掘で永遠に消滅した遺跡の死亡報告書だからこそ、その病名や遺体解剖の所見だけでなく、手塚く看病した家族の思い、投薬の種類、治療方法、病状の変化など途中の記録が大事だと思うのです。その欠を補うものとして週刊ニュースを作り続けました。

なお、37頁の遺構全体図の斜体数字は、週刊ニュースに掲載している号数と頁を示していますので、平成14年度に発行する本報告書と合わせてご利用下さい。(力武)

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第677集

雀屋遺跡 6

雀屋ムラのガイド・データブック
平成13年(2001年)3月30日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-1-8
電話 092-711-4667
FAX 092-733-5537

印刷 祥文社印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南4-15-17
電話 092-411-1611

見返し的人物写真は、主に発掘作業員の清池雅則さん撮影です。





